

明治大諷刺

文字反  
古增補

井上秋劍編

書

叢

錢

五

第

貳

編





政治經濟擔任 法學士 上野貞正 法學士 島田俊雄 長谷川清

政治 雜誌

# 王道

第一號

十一月三日發兌

壹部十錢  
年前金五十四  
錢○一部郵稅  
壹錢○廣告料  
一頁六圓

別天地擔任 文學士 久保天隨 井上秋劍 (毎月一回發行)

政治の學術を研究して政治の實際に應用するの目的を以て政治雜誌『王道』は生れたり満紙悉く是れ二十世紀の活題目活研究、彼徒らに多少の讀者を得んが爲めに無用の贅文字を並列するは斷じて取らざる所也

政治之部  
別天地之部  
經濟之部

○社説△政治の大本△社會民主々義○外國事情△支那問題に關する「コ  
ホウリン」氏の意見△露國の内情△「ホア」戦争の影響  
○霹靂舌△拈花微笑錄(古羅漢)△秋劍樓鬼語(古寶劍)  
○社説△方今の經濟問題に關する管見(第一總説、第二財政問題と經濟  
問題)○論説△戦争と經濟△政府事業繰延の得失  
本郷區 西片町  
十番地  
神田區 表神保町  
三番地

王道雜誌社  
東京堂



鬼

語

王道雜誌社

寄附本

露骨なるもの

刺に非ず、

に非ず、

諷刺に非ず、

を得ざるもの

中らざるもの

領を得ず、

を以てし、

刺に非ず、適中せざるものは諷刺

容易に解せしむるものは諷刺

に解し難からしむるものは

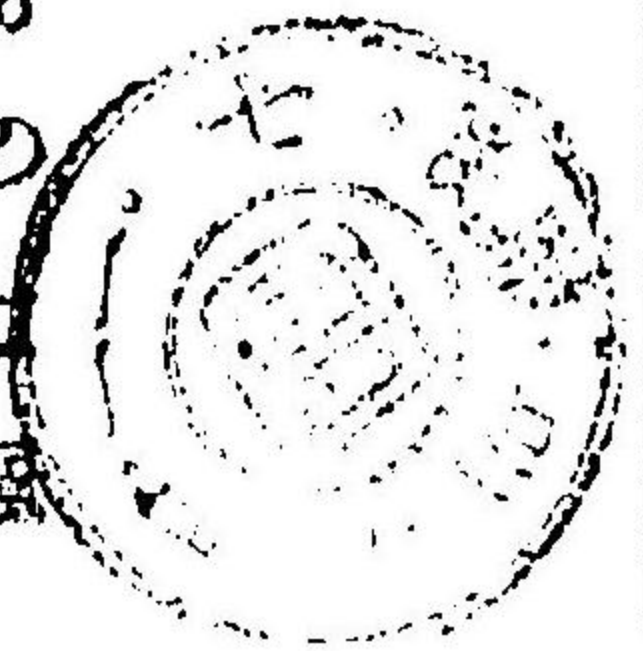
諷刺に非ず、要領

を得ざるものは諷刺に非ず、要領

中らざるもの、多く露骨、多く

領を得ず、しかも大聲叱呼、名づくるに明治大諷刺

を以てし、敢て大家と馳驅を同ふせんとす、何すれ





ぞ其れ然る、天<sub>ノ</sub>之を知らず、地<sub>ノ</sub>之を知らず、秋<sub>ノ</sub>劍<sub>ノ</sub>之を  
知らず、十五錢<sub>ノ</sub>叢書亦た之を知らず、記して大方に  
問ふ、

井上秋劍

明治大諷刺 増補文字反古

目次

百獸百賦	一
獅	二
虎	四
象	四
牛	五
馬	七
鼠	八
熊	一〇
猪	一一

目次



狸 ..... 一二

猫 ..... 一三

狼 ..... 一四

犬 ..... 一五

兎 ..... 一八

羊 ..... 二二

狐 ..... 二三

猿 ..... 二四

鹿 ..... 二五

獺 ..... 二七

明治伊蘇普物語

狸の腹鼓破裂す ..... 二九

食品共進會と狐 ..... 三〇

政黨内閣と禽獸蟲魚 ..... 三二

蝙蝠曖昧黨を組織す ..... 三七

狐の獸王當選運動 ..... 四七

自由廢業の猫 ..... 五五

猿犬維と桃太郎 ..... 五七

盜賊新聞

社説 ..... 六二

電報 ..... 六八

雜報 ..... 七〇

盜事片々 ..... 九一

評林 ..... 九六

寄書 ..... 九七

廣告 ..... 九九

目次



放蕩學會雜誌

發刊之辭

戀愛平等論

放蕩學會雜誌の發刊を聞いて感あり

經濟界より看察せる放蕩學

論語講義

放蕩學に就て女子の教育

戀の豊太閤

小説月下の心中

漢文

詩

和歌

俳句

放蕩時事

一〇二

一〇六

一一二

一一三

一一六

一二二

一二八

一三三

一三八

一三九

一四一

一四六

一四七

明治大諷刺

增補文字反古

百獸百賦

百獸百賦

井上秋劍著

會心の語解せざるを以て之を解し無稽の言聽かざるを以て之を聽く我百獸百賦或は是れ無稽の言こいに百獸を捉へ來り文字を以て之に戯るたどへば彩毬を輾ばして猫見を挑みパンを投げて犬をして吠わしむるが如きのみ世或

明治大諷刺



放蕩學會雜誌

四

發刊之辭……………一〇二

戀愛平等論……………一〇六

放蕩學會雜誌の發刊を聞いて感あり……………一一二

經濟界より看察せる放蕩學……………一一三

論語講義……………一一六

放蕩學に就て女子の教育……………一二二

戀の豊太閤……………一二八

小説月下の心中……………一三三

漢文……………一三八

詩……………一三九

和歌……………一四一

俳句……………一四六

放蕩時事……………一四七

明治大諷刺

增補文字反古

百獸百賦

百獸百賦

井上秋劍著

會心の語解せざるを以て之を解し無稽の言聽かざるを以て之を聽く我百獸百賦或は是れ無稽の言こゝに百獸を捉へ來り文字を以て之に戯るたどへば彩毬を輾ばして猫兒を挑みパンを投げて犬をして吠わしむるが如きのみ世或

明治大諷刺

一



は自ら戯文と稱するを愧づ、戯文何の不可かある花に戯れ、  
月に戯れ酒に戯れ色に戯る有情の動物免かれず、文字に戯  
るは其見高し矣、其所謂戯文中の最も戯文なるもの即ち  
百獸百賦と爲る諷刺を其間に寓するに非ず、不平を其筆に  
漏らすに非ず、作らずとも善し世を益せず、作るとも可なり、  
世に害無ししかく無用の文字に慘憺の意匠を費やす、馬鹿  
の骨頂と笑は、笑へそこが則ち會心の語讀む者希くは解  
せざるを以て之を解せ、妙は要領を得ざるに存せん、

獅

恐ろしき姿、恐ろしき聲、一たび吼ゆれば、百獸潛伏、天地も爲

めにゆるぎうごき、日月も爲めにふるひねちなん、ライオン  
の名の雷音の字と國音同じきも奇といふべし、實にもは  
げしき獅子王の勢と獅子とらでんの舞樂のみぎん、石橋の  
謠には脅してあれど、高が畜生一匹の彼何物、小鼠の牙に畏  
を免かれたりと、伊蘇普物語に浮名を流し象に踏み殺され  
牛と差し違へたりと、外國新聞にうたはれて其鼎輕き牡丹  
に戯むるは身中の蟲を殺ろさん爲めのみにあらざる  
べく、鞠持たせられては萬事無心なにも忘れて之を弄ぶど  
かや英雄色を好むと人間とかいふ動物の仲間には流行る  
と聞けど、畢竟神前の高麗狗、太神樂の頭に載せられて、笛や



太鼓で囃さるゝしる物のみ、牡丹に戯る獅子は恐るゝ程の  
猛獸にあらずして色を好む英雄は崇拜する程の偉人にあ  
らずと知る可し。

四

### 虎

虎ハ山ニ住ム大ナル獸類ニシテ、其形ハ猫ニ似タリ、膳巴提  
士ノ拳骨ニ擲グラレ、加藤清正ノ鎗先ニカ、ル生キテハ鐵  
網ニ入レラレテ見世物ト爲リ、死シテハ皮ヲ剝ガレテ敷物  
ト爲ル、嗚呼哀哉、南無カラタンノウ虎ヤア、く、喝、

### 象

身要莊嚴、意要閑定、色要溫雅、氣要和乎、嗚呼君子之德、象獨得

焉。眞個英雄之姿、獅不如矣。智超百獸之群、勇奪三軍之師、女王  
霸圖、身毒遠征、新莽帝業、昆陽一敗、時有利兼不利、豈因智與不  
智、出于交趾、耕於歷山、有忠有順、維孝維義、嗚呼君子之德、象獨  
得焉。眞個英雄之姿、獅不如矣。

### 牛

うしとふ世、うしとふ名こそかなしき、むまれて鼻をときは  
りにさし、れ、おいて身をするときつるぎにほふるゝまで  
のいのちに、あらゆるくるしきわざをいと、なむ、あるはも、  
まぢの田をたがやし、夏を吳門の月に喘ぎ、あるはつらさを  
りの坂をのぼり、車を大津のあめに曳く、いもせのちぎりも



たねどらるゝばかりにたねをのへへだつるふしどになけ  
どもかひなく乳はひとの子をやしなふがためにしぼられ  
てうゆるこうしをおはれめどもすべなしつみなくしてね  
きてのにはの露ときほゆくすゑはいかにひとりとなふ  
るいやしきれのこの手にわたりむくろはいくきだにもき  
りはなたれてすきやきのなべにたまねぎをまくらに泣く  
をおはれと見る人をなみ舌うちしてうたげのさけくむこ  
ろねそろしけれ人はけものをねそろしといひなさけしら  
ぬものといやしむわれは人ばかりねろろしのこゝろもち  
ていみじうなさけしらぬものはべちにあるまじうねもほ

ゆと桃のはやしにあつまりし牛どものあげつらひろうじ  
き

馬

君不見秦宮指鹿趙丞相佞媚爲風滿京洛又不見唐代畫馬曹  
將軍坎壇纏身頓溝壑聖皇在上明治年人材畢至凌煙閣凌煙  
功臣何所爲却見天馬笑人爵天馬曾聞金華山目光如電耳如  
削拳毛騮兮玉花驄相見惆悵肝膽落一朝韓山烽火傳千里廣  
陵鐵蹄躍淋漓汗血其勞多縱橫馳驅無繫縛何料文臣愛身武  
臣愛錢春風得意平淮樂三國衣冠貪小康五州風雲壓大漠或  
禍或福塞上翁連雲芳艸忽折脚臨風長嘶淚如泉八龍九逸今



岳武穆云文臣愛錢武臣愛身馬云文臣愛身武臣愛錢

鼠

やすみじ、あがねほきみの しろしめす やまとしま  
 ねは あまひこの てるひのもとに もくけもの よろ  
 づのむしの やすらげく すまるくぬち いかてかは  
 ねづみのたぐひ ころしばの しばくおはれ いと  
 ぐるま くるしきせめに あふみのや みのゆくすゑは  
 かけわなの かけてすたのむ かみにさへ ほどけに  
 さへぞ すてられて うたれころされ もくたから ま

くきやらかみに みやつかふ かひころなけれ べすと  
 てふ わろきねやみの われにありと たれかしひつる  
 ひとおには なほおそろしき わいろてふ ものくけ  
 もてる やほよろづ あまつみかみは しろねづみ し  
 ろしめさずや むくらもちの やみのよのなか はつか  
 ねの ちさきうたへは おほそらに きこえざるらじ  
 わびしらに なくもかひなし あづさゆみ ゆづかたに  
 ぎり ふりたこす やまどごころの きばつるぎ みか  
 きてゆかめ ひどのこを かみつくすべく みかきてゆ  
 かめ



反歌

くろがねのはこそもうがつきばのあるに

なにをねづみのねをのみぞなく

熊

むかし熊ありけり山にすみけり月のねもしろき日人の訪  
ひ来てうらやましき住居などいふ穴のふしどに伴ひて夜  
もすがら語り明かす面白う月のさし入れければ人

あな熊のあなねもしろの住居かな

ふしどにありて月も見るべく

と詠むさにあらずとて熊

月の夜は月の輪めさすかりうどの

征箭のたよりとなるが悲しき

となん誰が身の上にもうきはあるものぞたい見るほどあ  
もしるきものにはあるまじなどかたりて泣きぬ

猪

萩抱いた夢を驚かすから筒のひいき折もあらうに名月の  
今宵われを脅どすこと憎しや葛城山にみかどの御前をさ  
わがす罪も犯さず富士の裾野に仁田の四郎と力くらべん  
野心も無きを芋堀らんとするものと思ひ僻めてか抑も人  
萬物の靈とこなたよりあがむればよきことにしてどこま



でわれ等をくゝるしめんとや一寸の虫にも五分の魂四尺の大兵に二尺の骨はあらんまてしばし

朝寒や猪の牙とぐ枕もと

狸

一幅秋風雙狸圖忍看狡狴躍皇都誰催獸力獸王死怪殺人間狂悖奴

滿目雨過秋味新一天風露月如銀人間到處牛衣客獨有山林鼓腹民

人間堪笑頤傳異空谷寔音姑決皆文福茶釜何處存秋風落日茂林寺

猫

うき戀を夜すから泣きてから猫の

別かるゝ屋根に有明の月

戀にかくやさしきものをねそろしき

こゝろと猫を思ひけるかな

猫の兒の小籠の小ぶさにたはぶれて

くび輪の鈴のたゞ鳴りにけり

ぬすみする猫もくりやにたちさわぐ

人にこゝろをねきつ白浪

つひにかくなりもはてぬる老猫の



鼠にだにもあなづられつゝ

狼

狼も長閑に眠る春の山

狼の息は火となる暑さかな

稻妻に狼の顔見られけり

のそく／＼と狼あるく秋の暮

狼の二ひき連れ立つ枯野かな

狼の一聲高し峯の月

楳焚いてまた狼のはなしかな

駈落を狼ねらふ夜寒かな

寒月や狼瘦せてねそろしき

狼の里に入りこむ山の雪

狼に子をとられたる狂女かな

犬

馬子の賊兇、天を衝いて、稻城の壘は、落日秋風、守屋のねど、  
いは討たれ玉ひぬ萬のうしも自盡しぬ、首級敵手に委す可  
らす之を護して死す、義犬の墓しばらく風塵に落ちて九重  
の雲を見ざること幾百年、一條天皇の御宇召されて、祿賜は  
る翁丸倭辟を旨とするから猫の命婦のおどいが驕態見る  
に得堪はず、一夜牙をして磨して博浪の鐵推紫宸殿前の月



一六  
に揮ふ。韓に報じて成らず。逆鱗赫として官を剝れ。祿を褫はる。貶謫の孤臣。雲秦嶺に横はり。雪藍關を擁するも。忠義の心凍として存ず。至誠終に九重を動かして。天子召還急なり。再び列なる花の宴。子孫忽ち祖先の遺烈を忘れ。都を背ひて。鎌倉山の星月夜。威勢輝やく。三鱗の光を仰き。相模入道の旗下に屬す。寵遇身に餘りて。諸將士の上に位し。食に魚有り。出づるに興有り。驕るもの久しからず。極樂寺の切通しに。中黒の旗風に翻へり。九世の覇圖一夢の中。赤族の禍免かるゝもの。少れなり。尾も右捲きの落武者となりて。犬の種こゝに盡き。なんとす。別に勤王の心を存するの好漢あり。萬夫不當の勇。

新田殿四天王の隨一人。畑六郎左衛門の股肱と爲りて。犬獅子の名雷の轟くが如し。元弘建武の空妖雲慘として垂るゝの間。幾たびか煩やます。足利の軍南風競はず。天下は足利の天下と爲りて。世は華奢風流の優男に占めらるゝに至りて。永く聲をひそめて吠ゆるとなし。後世曲亭の八犬傳故さらに空中の樓閣を設けて。此年間の歴史を飾れり。徳川氏覇府を創めて。江戸の花咲く大樹將軍五代の主元録の廷に徴して。犬公方の渾名を取りそ。いろ鎌倉山の面影を偲ばしむ。されど暫時に衰えて。十五世の金湯明治維新の波風に崩れ錦の旗の手勤王の風に萬艸靡き。再び丈夫漢得意の時代と爲



一八  
り○一○代○の○風○雲○見○西○郷○隆○盛○の○知○己○を○受○け○大○隅○山○の○狩○倉○に○侍○  
り○し○も○明○治○十○と○せ○の○秋○の○末○英○雄○首○を○回○ぐ○ら○せ○ば○即○ち○神○仙○  
龍○に○騎○り○て○彼○白○雲○の○郷○に○去○り○し○よ○り○ま○た○國○士○を○以○て○遇○せ○  
ら○る○い○の○知○に○合○は○ず○徒○ら○に○庶○人○を○以○て○辱○し○め○ら○る○突○り○耳○  
に○尾○を○卷○き○上○げ○し○日○本○の○種○は○皆○屠○狗○兒○の○手○に○落○ち○て○残○る○  
は○卷○毛○低○耳○の○西○洋○の○犬○風○は○蕭○々○と○し○て○長○く○城○山○の○松○を○吹○  
き○月○は○皎○々○と○し○て○空○し○く○義○犬○の○墓○を○照○ら○す○

兎

うき世に遠き深山路の  
塵 人間と隔だつれど

神をなみする罪惡の  
こゝにも潜そむ罪惡の

春、遙嶺の花を愛で  
夏、前溪の月を汲む  
身は神仙に似たれども  
居は仙郷に似たれども

秋は紅葉の錦繡被  
榮華の夢を結べども



冬は雪間の行路難  
無常の鐘も聞こゆなり

里のわらべの張る網に  
妻はあはなくかゝりけり  
山のさつ男のうつ筒に  
子はいたづらになりけり

榮枯盛衰夢の間に  
哀別離苦のなやみあり

厭ひて入りし山ならむ  
厭ひて山を出でんかな

断崖峙つ山千尺  
絶壁削る海萬里  
よせてくだけて散る玉は  
是れ人間のものならず

神の御わざの波間より  
湧くや瑤臺十二重



月○の○都○の○見○ゆる○なり○  
か○け○り○て○往○かん○い○ざ○ら○は○

羊

一筆啓上仕候、左候得ば羊儀是迄我國には居住致候者に無之、支那にては三牲之中に列ねて珍重致し居、羊を宰て天を祭る等の事を申し、羊頭を懸けて狗肉を賣ると申すと承り及び候、蘇武は朔北に之を友とし、晋の好色天子は此物に車曳かせ、後宮を運動致し、羊の留まる所を其夜の闇と相定候次第に付宮人共鹽を竹葉に漑ぎ、竊かに君王の我に幸せんことを相待ち候由、今の勳位様はじめ紳士紳商とか申す

方々に聞こえ上げたき義に候、此に引替え西洋にては羊飼といへば屢々詩人の材料に用ひられ候趣にて、耶蘇基督を形容して神の園の小羊の如しと有之候如きは、最も神々敷の至極にて、羊の名譽一段と相心得候、是にて他は申すに及ばず候草々頓首

狐

狐之本家本元誰、豚尾近來大禪垂、金毛九尾昔之事、外交政略今此時、三國傳來河童屁、萬事投出絲瓜皮、李鴻章爺最不喰、向人色々並世辭、言事一々不成當、談判御定便々遲、其處西洋古狐共、不負不劣、爭營私、忽化別品、遣色目、更爲敵役、撫青髭、或諫



殺生。白藏主。紛交。人間。葛葉姫。領土分割。不油斷。永代借地。空嘘。  
 吹。九十九年。暫預置。四百餘州。迎難持。魂胆。往生。寒念佛。魂々痴。  
 奇魂痴奇。此際。東方。君子國。同入。仲間。爲山師。鼻先。思案。攫赤飯。  
 深謀。一無御存知。鼠天。猷羅多。喰物。用心。第一。可唾眉。

猿

猿廻し。さりとは濁る世の中に

濁らぬ人のまたあるかいな

毛を吹て。經をもとむる孫悟空

三本足つた智慧が三藏

さる程に。さてもその後。猿冠者

敵とふものは見ざる聞かざる

猿飴の口に甘くも腹の中は

からたち寺のむばらある世ぞ

猿嶋に繋げる馬の猿真似は

意馬心猿の狂るふ將門

鹿

鹿曰く人間の泣くを聞くべいか

山かつの屁とも思はぬ鹿の聲

一年も立たぬに夢野の後家孕み

林間酒を煖めて鹿を追ひ拂ひ



鹿に似た馬でござると阿房宮  
 鹿と左様かと趙高念を推し  
 馬鹿な奴等だと趙高あとでいひ  
 馬鹿な詮索をして居る阿房宮  
 猿九大夫啼く猿といへばいゝ  
 落語家芝居鹿が馬と爲り  
 山に登る行者は鹿を見ず  
 奈良の警察落角の届出にこまり  
 秦の天下中原の馬を失ふ  
 孔子は麒麟を得趙高は鹿を得たり

動物園しか珍らしう思はれず  
 奥山に紅葉踏み分けさうな壽老人  
 春日野の飛び屁と洒落ん鹿の糞

獺

ぬしは河獺うそのみいふて  
 深い約束水にする  
 獺の祭の魚かや戀に  
 瘦せてのころは骨どかは  
 こゝろ河獺浮氣もするよ  
 もとが流れの身じやないか



起請誓紙も河瀬の皮

銭の有る衆の襟につく

戀の闇路をつい踏みはづし

濡れて色ます瀬のつま

〔瀬和名「かほおそ」今「かほうそ」と訓す俗歌方言に従ふなり〕

## 明治今伊蘇普物語

### 狸の腹鼓破裂す

八疊敷の翠丸を持ち、腹を膨らして之を鼓つ、其腹鼓の面白き獸類社會一般の評判と爲り、狸の至る所いつれも腹鼓を所望せざるは無し、狸頗る得意なり、兎曰く狸公願くは我が爲に鼓を打て、我餅を搗て、大饗せん、狸喜んで腹を鼓ち、即ち爲に鼓を打て、我餅を搗て、大饗せん、狸喜んで腹を鼓ち、即ち餅の馳走に預る、狐曰く狸公願くは我が爲めに鼓を打て、我美女に化して足下の目を怡ばせん、狸喜んで腹を鼓ち、則ち美女の酌にて一杯飲む、熊曰く狸公願くは我が爲めに鼓を



打て、我手製の熊掌を將て足下に振舞はん、狸喜んで腹を鼓ち、則ち熊掌の甘きに舌打ちす、到る處此の此くにして美味口に入り、美色眼を怡ばす、腹を鼓つと日に幾百回、終に腹皮裂け臟腑溢れて而して死す、自己の技能を恃み、之れを賣るの慾に迷ひ、過度の腦漿を絞り、過度の勞苦を爲すもの憐むべきかな

### 食品共進會と狐

禽獸昆虫、相諮りて食品共進會を開く、各其手づから製する所を出品して、以て喝采を得んとす共進會場參差絡繹たり、就中最も審査官の眼中に映じて優等に撰ばるゝもの、海燕

の出品せる燕窩、蜜蜂の出品せる蜂蜜、猿の出品せる野猿酒、雕鷹の出品せる雕鮮、皆金牌銀牌の賞を受く、而して多數の最も奇怪に感じたるは、狐の出品なり、素麵あり、饅頭あり、其他食品最も多し、審査員たる犬は、其鋭敏なる鼻をうごめかして之を怪しと爲し、出品人なる狐を召きて之を詰問す、曰く此出品物は悉く貴君の製造せしものなるや、狐曰く然りと、犬更に馬を召きて問ふ、曰く此狐君の出品せし饅頭は足下覺に無きや、馬熟視一番して曰ふ、是れ眞の饅頭にあらざ、僕の糞なりと、犬更に蚯蚓を召きて問ふ、曰くこの狐君の出品せし素麵は足下覺に無きや、蚯蚓熟視して大に驚いて曰



ふ、是れ余輩の同胞なりと、則ち狐を責めて之を嚙殺し畢る。

### 政黨内閣と禽獸虫魚

政黨内閣は利か害か、人間は之を以て唯一の完全なる政治を施すべきものとなせり、人間以外の動物亦之に倣ひ各々其党派より適當の材を撰び、内閣を組織せしめんと發言する者あり、衆相賛して議こゝに一致し、先づ順番によりて獸類内閣は組織せられぬ(假名は通常呼名の字音を用ゆ)

内閣總理大臣	シ	シ公	内務大臣	ト	ラ侯
陸軍大臣	ウ	マ氏	海軍大臣	ク	ヲ伯
農商務大臣	ウ	シ氏	外務大臣	キ	ツ子男

逓信大臣	ラ	クダ伯	大藏大臣	サ	ル公
文部大臣	ソ	ウ侯	司法大臣	チ	コ子
警視總監	イ	ヌ氏			

獅首相、象文相、馬陸相、鯨海相、牛農相、駱遞相等は適任なれど、虎内相は酷に過ぎ、猫法相は鼠族より外には威重なくして侮られ、狐外相は狡猾なるが爲め列國の怨を買ひ、猿藏相が監守盜を爲したると、犬警視の發見する所となり、他黨の攻撃甚だしく、終に責任を負ふて内閣總辭職の始末となれり、鳥類黨之に代りて、左の如き内閣を組織せり

内閣總理大臣	ワ	シ伯	文部大臣	ツ	ル公
--------	---	----	------	---	----



陸軍大臣	ニハトリ男	海軍大臣	ミサゴ氏
内務大臣	ツバクラメ氏	農商務大臣	カラス氏
逓信大臣	ハト氏	司法大臣	タカ氏
大藏大臣	スヤマ氏	外務大臣	ガノン氏
警視總監	トビ氏		

鷄陸相は徒らに戦争を好み、雁外相は漫に外遊を爲すのみにて外交の奏効無く、燕内務は一家を治むべく以て一國を治む可からず、鷹法相、唯海相稍々適任なれども、鴉農相の如きは農業の發達を妨げ、雀大藏は藏米を竊む、鶴文相、鳩逓相の適任なるあれど、内閣の信望を回復しがたぐ、暮年ならず

して破壊せり、魚介黨代りて

内閣總理大臣	タカヒ公	内務大臣	ハマグリ伯
外務大臣	エビ男	陸軍大臣	タカコ氏
海軍大臣	イカ氏	大藏大臣	サザエ子
文部大臣	コヒ公	逓信大臣	ホラノカイ氏
農商務大臣	ニシン氏	司法大臣	キンキヨ伯
警視總監	イワシ氏		

榮螺藏相は消極的財政方針を取るが爲め、經濟界は沈滞し法螺逓相は大言壯語するのみ得意にして、鯉農相は唯だ肥料と爲るの材能あるのみ、蛤内務は全く鎖港主義にして略



ば、榮螺藏相の財政方針と同じく、金魚法相の如き、鯛首相の如き、鯉文相の如き、皆文采風流に於て美なるのみ、蛸陸相鳥賊海相皆無能の輩、蝦外相は頤りに腰を屈するのみ、自屈主義の外交竟に議會の非難を招き、内閣は破壊の運に終る之に代るもの昆虫内閣

内閣總理大臣	ワ	ニ伯	内務大臣	カ	エル男
外務大臣	ト	ボ氏	海軍大臣	ミ	ヅスマシ男
陸軍大臣	ハ	チ侯	大藏大臣	ア	リ公
文部大臣	ホ	タル氏	逓信大臣	テ	フ氏
農商務大臣	ウ	ンカ氏	司法大臣	ク	ソムシ氏

蟻の藏相、蜂の陸相、蝶の遞相の適當なるあるも昆虫内閣とは驚き入りたり、螟虫を糞虫大臣として戴かざるを得ざるに至る、人間たる者少しく鑑みる所あるべき也、

### 蝙蝠曖昧黨を組織す

人類は暫らく措く、曰く獸類、曰く鳥類、曰く介類、曰く魚類、曰く蟲類、動物各自其所屬あり、苟も混雜す可らざるなり、皆志を一にして所屬種族の躰面を保持するに勉む、而して衆種族の中動もすれば其志を二三にするの卑劣漢あり、其形軀の紛らはしきに乗じ、兩類族に通じ、曖昧摸稜所謂二股武士の態度を以て、利を其間に罔せんと欲す、彼蝙蝠が獸類とし



て麒麟の賀筵に趣き鳥類として鳳凰の慶事に列したる普  
ねく人の知る所なり、今や人間界の事、人に操守の行無く士  
に名節を重ずる者少れなり、二君に仕ふるの忠臣相率ひ、兩  
夫を更ふるの貞婦伍を爲す、獨り朝に越客を送り夕に吳郎  
を迎ふるの娼婦のみ然るにあらざるなり、堂々國士を以て  
自ら居る者亦た之を敢てして羞づると無く、却て得々とし  
て其拘泥せざるの機智に誇る、蝙蝠此狀を傍觀し、以謂らく  
人間といふ奴はなか／＼旨い哉、我寧ろ彼を學ぶ能はざら  
んや、夫れ我の動物界に生るゝや、夙に兩種の特長を有す、昔  
に在りては、無鳥里の蝙蝠或は蝙蝠も鳥の中等の諺を作し、

以て我を鳥類に屬する者とせり、近世動物學の開くるや、其  
全身の構造より看察し、無論獸類に屬する者と認定するに  
至れり、然れども我が双翼に至りては、他獸の企て及ばざる  
所鳥類と毫も異なる無し、如かず動物界に於ける我と感を  
同ふする者を會し、一の黨派を組織し、名づくるに曖昧黨を  
以てし、我之が牛耳を取らんか、動物界に於ける我位置大に  
高まるを得ん、豈快ならずやと、則ち曖昧黨組織趣意書を四  
方に飛ばし動物中の二志連を招く、招きに應ずる者、鯨、海豚、  
一角、狸々、狒々、お玉杓子、鱒蝶、臘肭臍、海豹、兎、海鹿、海月、海老、海  
鼠、鴨嘴獸、鰻、角鴟等の面々にして、いづれも尾を戟にし、嘴を



鳴らし羽を搏ち鬣を奮ひ、意氣頗る壯なり、蝙蝠は先づ衆動物に對し、其來會の厚意を謝し、且つ新黨組織の趣旨を陳べて曰ふ我々動物は古來分類して人獸鳥魚介蟲等の目あり、然れども是れ彼の人間なる者が其靈長の虚位に誇り、私にしかく命じたるもの耳、故に一個にして數個の類似特色を并有するものは、彼等之を分つに頗る迷ひ、古今其見を異にする者多し、我輩蝙蝠の一種族の如き、鯨君海豚君の一種族の如きは其最も彰著なる者なり、其他滿場の諸君の如き皆、是れ人間の種類別に對して不服を懷抱する者にあらざる無からんや、我輩此に感あり、此に諸君を會し、人獸鳥魚介蟲

の族より分離して此に一大新種族を作り曖昧黨と名づけ以て從來の羈絆より免かれんと欲す然れども諸君中若し曖昧黨たるの資格を有せず、或は余が意見に不同意なれば、團結竟に成る可からず諸君希くは此席に列する資格ある所以を陳べ、且つ我輩の異見に贊同あらんとを、陳じ終て壇を下る、此時鯨は其巨大なる體軀をやをもち上げ發言して曰く、余は目下籍を獸類の所轄に置くと雖、水に浮び尾を揮ふ、其行動魚と異なる無し、古人余を魚類と爲す、謂れ無きに非ざるなり、要するに余は獸に従ひ又魚に従ふ、一類に專屬すべからず、是れ曖昧黨組織の加盟者たる所以なりと、



海豚、一角聲を揃えて曰く余等は鯨君の一種族なり、此席に列するの趣旨鯨君と同じ、猩々は曰く余は獼猴の一種族として籍を獸類に置けり、然れども余は渾べての點に於て人類と異なる無し、人間の中にも既に之を是認する者あり、乃ち一類に專屬する能はざる所以とす、蝙蝠君よ希くは余をして一黨統理の任に當らしめよ、進んで人間に交渉する所あり、新たなる斯一族類をして、直ちに人間の次位に居り、以て獸類鳥類の上に在らしむ可しと、狒々曰く猩々君と同意、れ玉杓子曰く余は蛙を父にすと雖、其水中に在るや宛然として魚なり、獨り蟲類に專屬す可からずと、鱈曰く、其字は魚

に従ひ、其貌は獸に従ひ、其體は蟲に従ふ、しかも蟲類に專屬す可からず、則ち來て曖昧類の新組織を賛すと、蝶は曰く、余が蟲類に專屬す可きは天下の齊しく認むる所なり、然れども余に翼あり乞ふ鳥族に類似せりとして曖昧黨の加入を許せ、若し余にして曖昧黨に加入するの資格ありとすれば、余は蟬、蜻蛉、蜂、虻、螢等をも勧誘し來り、斯團體の爲めに盡力せしむ可しと、膾膾曰く、余は獸に專屬すべきと勿論なりと雖、海に住みて魚と伍する者なり、敢て斯舉に預らんとを望むと海豹曰く、膾膾君と意見を同ふすと、兎曰く、余も亦た獸類に專屬すると、勿論なりと雖、余の内臓の一種に」と



りなるものあるのみならず、骨格其他大に鳥に類する者あり、往昔人間余を呼ぶに一匹二匹を以てせずして一羽二羽を以てす亦以て證とすべしと、海鹿曰く誰か余を以て蟲類と爲すや、紫血淋漓以て獸班に伍すべし、海月曰く魚か骨無し、蟲か目無し、鳥か翼無し、獸か脚無し、余の如き眞個陵蝦黨の種類に屬すべきものなりと、海老曰く漢字或は蝦に作り或は鰈に作る、魚に屬さんか、虫に屬さんか、螺貝氏の宿を借り時に海月君の眼と爲る、余が曖昧黨入籍の資格ある、豈海月君に譲らんやと、海鼠曰く、海月君よ、海老君よ、多く自ら誇るとを休めよ、余の形體を見よ、前後なく左右なし、眼耳鼻舌

なく四肢九竅無し、居然海國の一怪物、以て曖昧黨一方の鎮たるに足ると、鴨嘴獸曰く、濠州の土人余を誤り見て鳥と爲せりと、鰻曰く、臆病なる蛙余を誤り見て蛇と爲せりと、角鴟曰く、大馬鹿三太郎余を誤り見て猫と爲せりと、驚然たり焉、騷然たり焉、蝙蝠之を制止して曰く、休めよ、諸君、諸君の熱心嘉しすべし、諸君皆曖昧種新設に加はるの資格あり、速やかに狸々狒々兩君を勞して人間と交渉を開始し、人間の下鳥獸の上、一個の族類を建設するに力めん、時に膈膈發言して曰ふ、此席一個の欠くる者あり、彼北海道の熊何すれや來らざる、彼奴陸には馬を負ひ海には魚を捕ふ、屢々我曹の領



分を犯す、彼亦曖昧黨の一個なり、請ふ速かに檄を傳へ彼を招致すべしと言未だ畢らざるに背後に聲あり、百雷の轟くが如し、曰く我れ數刻前より來りて汝等の會話を聞くと、看得たり、一個の一大猛熊、全身赭赤、毛髮人立す、更に大喝して曰く、咄汝等井中の蛙、無鳥郷の蝙蝠、一山百文のウツ虫めら、汝等身の無能を顧みずして黨を樹て社を結び、別個の種族を作り、以て人下獸上に居らんとす、曖昧黨の文字、汝等は以て名譽となすか、丈夫主張あり、獨立獨行、自己の分を知り、自己の所屬を明かにし、苟も貳心を存し、異圖を抱くとある可からず、蟲魚にして鳥獸を冀ふ、愚なりと雖、尙ほ健氣なり、獸

にして鳥魚介蟲を冀ふ、何ぞ其陋なる、汝等偏に名利を知るのみ、變心賣節自ら以て得たりと爲す、豈操行を知らんや、豈名節を解せんや、猩々狒々の人間を冀ふが如き、只是れ其外を論じて内を知らざる、非望覬覦に他ならず、生きて社會に益無なく、在りて世間の害を爲す、我頃者好餌無くして少しく飢へたり、汝等を引裂き食ひ以て余が腹に葬らんと、衆驚愕して飛散す、怯懦なる鯨漸く海に入て這がれ、蝙蝠飛ぶと雖、霄に冲る能はず、洞谷に潜匿して、竟に猛熊の鋭牙に懼る、操守なくして漫に名利を貪るもの、以て箴とすべき也

### 狐の獸王當選運動



獸王獅、漸く王冠の窮屈なるに飽き、誰か我に代るものあらば、我王位を譲る可しと云ひ出しぬ。ろの一聲の威は重く、撰舉運動は始まりけり、乃公こそ獸王の後任なれど野心勃々の輩少しとせず、虎は猫類を率ひて運動に着手し、熊もなか／＼に侮る可からず、牛は双角を磨して徐々と勢力範圍を擴張し、馬も亦た其類を率ひて萬物の靈長人間に最も接近するものは乃公なりと唱導すれば、人間に近いとあれば馬は奴隸我は人間の祖先と猿族の一派狸々を候補者として顯はる、勇はあれど智感百獸に超ゆるの目ある象は敢て自から撰舉渦中に投ぜざれど、豕の一派之を推し立て、獅

子王すら一步を譲り玉ふ我象君の智勇を見ずやと擔つぐ、選舉競争漸く激甚なるに隨ひ、人間さへも免かれざる腕力沙汰、况んや之が本家本元たる、獸類社會に於てをや、角を揮ひ牙を磨き、爪を逆にし蹄を鳴らし、驚破獸界の大争亂、野に闘ふて其色玄黄、血を見ずんば止まざらんとす、危機一髪、顯はれたり鵜蚌の争ひを利せんとする卑劣漢、金毛九尾の子孫にして伊蘇普物語以來の御馴染なる狐、機會は額に毛あり全身滑、此時を外づす可からずと先づ獅子王の許に走り頓首百拜涙を流し白すやう、大王御覽じ候はずや、あはれ獸界の一大事變、選舉競争劇甚にして血の海屍の山遠きに非



ず、かくして、扱て選舉せられたる獸王の位も、大王の徳無き  
 やから忽ち衆怨の府と爲つて、刺客の牙に殺されなん、嗚呼  
 此の如きに至らば獸族竟に滅亡し、禽介虫魚の世界となら  
 ん、されば此の如く推されて選舉を争ふと雖其候補者中實  
 際此危険なる王冠を戴かんと申すものは候はず、臣不肖な  
 りと雖、屢々大王の澤に浴するもの、身を以て獸界の大事に  
 靖獻せん、希くは臣を以て大王の後任に擬し玉へ、臣死して  
 以て獸王の椅子は百獸の漫に希ふ可からざるものにあら  
 ざるを示し、百獸の争ひを鎮め、靜かに眞に大王の後任たる  
 ものを選舉せしむるに至るべしと、獅聞て狐の言を然りと

し、汝をして我後任に選舉さす可きやう盡力せんと約し、且  
 つ狐の丹心を嘉みす、狐涕泣拜謝して退き、身をひるがへし  
 て虎の選舉運動本部を訪ひ、豫ねて親交ある猫により虎に  
 謁し、頓首して曰ふ愚昧曾て閣下の威を借りて百獸を脅せ  
 し以來、衆愚昧を尊て閣下の次に居るものとするに至る、閣  
 下の鴻恩死すとも忘ぜず、今や獸王の椅子空しからんとし  
 て選舉競争劇甚なり、然れども獅王辭するの後閣下を措て  
 何物か當らん、只だ自家の慾に驅られ身の程を知らず閣下  
 と争はんとするのみ、閣下希くは愚昧を以て借りに其後補  
 者とせよ、誰か閣下の謙讓に驚かざらん、百獸耻ぢて皆棄權



せん、即ち愚昧假に獸王の月桂冠を受け、直ちに閣下に譲ら  
 ん、是れ争はずして取るの上計に非ずや、虎以て策の得たる  
 ものとなし、狐に許して疑はず、狐直ちに轉じて熊を訪ひ、曰  
 く、君勇なりと雖、未だ獅虎に如かず、象や牛や伯仲の間に在  
 り、衆思はん、未だ獸王の器に非ずと、請ふ僕に許して假りに  
 獸王の冠を得せしめよ、衆更に又思はん、狐すら此の如し、熊  
 亦た以て獸王の器たるべし、獅虎豹豺の獍猛ならんより、熊  
 の仁にして勇なるに如かずと、争ふて君を推さん、僕は固よ  
 り獸王の器にあらざるが故に直ちに退き、後任直ちに君に  
 歸せん、君請ふ迷ふ勿れ、熊コロリと臥して好しと稱す、狐獨

語して曰く、大事成れりと、即ち牛を訪ひて曰ふ、ソロ／＼行  
 くも田は濁る、急くな騒ぐなモ、暫らく待て、次に猿に説き  
 て曰ふ、何ぞ毛三本を求めて人間と爲ることを企てざる、一  
 朝萬物の靈長に伍す、獸王の位何かあらん、轉じて馬を驚か  
 して曰ふ、早く競争を止めよ、獸王已に虎に許して大勢定る、  
 近日獅虎聯合して軍を起し、他の非望を覬覦するものを嚙  
 み盡さんとするの擧あらんと、馬大に愕いて競争を中止す、  
 終りに象の家を訪ひ曰く、公は君子なり、令徳萬獸に超ゆ、何  
 ぞ牛鹿角上の小争を事とするやと、象は狐の譎を知ると雖、  
 元是れ君子の獸争を好まざる也、獸王の位を欲せざる也、豕



等を戒めて競争運動を爲す勿らしむ、狐の目的は達せられ  
たり、三寸の舌四方に説いて大勢全く定る、宛然是れ蘇秦が  
六國の相印を帶ぶる日、恰も好し獅は百獸に諮るに狐を以  
て後任の候補たらしめんことを以てす、百獸背くこと能ず  
して、狐は大多數を以て獸王の月桂冠を戴きぬ、而して狐の  
深谿なる、已に獸王の位に選ばれて人間に朝するに至るや、  
再び前言を顧みざるなり、百獸皆其欺かれたるを知りて啞  
然たり、しかも如何ともす可からず、自ら百獸を代表して周  
旋翱翔す、醜態漸く露れ、或は油揚の餌を以て釣られ、或は伯  
母に化けそこないて獵人に追はれ、獸類の動物仲間にあけ

る相場は大に下落す、禽介虫魚の侮蔑する所と爲り、人間の  
次位と迄崇められたる四足の動物の位地は、海中の小螺に  
までも及ばざる位地と爲れり、選舉を慎重にせざりし百獸  
の過也、何ぞ狐のみを咎めん哉、

### 自由廢業の猫

人間に娼妓自由廢業あり、猫之を聞て以謂らく、われ主人の  
眷寵を蒙り、食に魚有り臥すに褥有り、然れども鼠を捕らざ  
れば罪身に歸し、與へられざるの鮮を喰へば盜めりとして  
鞭撻及ぶ、剩へ兒女の玩弄する所と爲り、横さまに抱かれ、尾  
を握つて吊るされ、痛苦忍ぶ可からず、鮑貝中の飯少なから



ずにあらず、花鱈香ばしからざるにあらずと雖、かばかりの食物我獨力にして求め得可からざるの理斷じて無し、如かず自由廢業を爲して去らんにはと、其夕暮れ家を飛び出して復た還らず、正に是れ籠禽放を得たるの情、東往西來、足の赴く所に隨て縦横す、然れども飯は草より落ちざるなり、魚は淵より上らざるなり、鼠は家を出でざるなり、鳥は空より降らざるなり、しかも腹空ふして歩漸く苦しむ、終に盜まざるを得ず、何となれば彼は蟻を掌にするの熊にあらず、果を酒にするの猿にあざればなり、嗚呼終に盜まざるを得ず、然れども盜は易きが如くにして甚だ難し、且つ正業にあら

すして罪業なり、首尾よく魚店の魚を盜み去りて追はれざる少なく、未だ鶏屋の鶏を奪はざるに撲棒頭上より下つて悶絶する多し、末路天竺浪人ののら、猫と爲りて、瘦犬の牙に祭られ畢ぬ、猫は自由の文字を誤解したる也、

### 猿犬雉と桃太郎

昔々桃太郎の鬼ヶ嶋を征伐するや、日本一の黍團子を與へて従者とせし者、曰く猿、曰く犬、曰く雉、いづれも殊功を著し、桃太郎が鬼の王を降參せしめ寶物を分、捕して歸る、此三人與つて力あり焉、去る程にさても其後爺と婆とは先づ天に上り、桃太郎も尋で蒐せしかば鬼ヶ島より持歸りたる寶



物を保管するの役目、此猿、犬、雉三人の任と爲れり、然るに桃太郎の制馭の下にありてこそ、いづれも従順にして眞勇を旨とする立派の兵者たりしなれ、一朝桃太郎の薨去に遭ふや、各々相下らざるの心を生じ、猿は桃太郎の陣羽織を着、桃太郎の烏帽子を戴き、桃太郎の太刀を佩ふことを得るの資格あるを理由として、犬雉の上に立たんとし、犬は其勇氣の優れたる點と嗅官の鋭敏なる點と、鬼ヶ島征伐に最も功有りしを名とし腕力を以て猿雉の上に立たんとし、雉は禽鳥族なる一點のみ猿犬の獸族たるに譲るが如しと雖、翼有りて能く空中を飛行するの特長に依り、猿犬の上に立たん

とし、其争や單に地位の争のみならずして彼鬼ヶ島征伐の戦利品たる寶物を己一人にて占有せんとの慾心一大原因と爲り、且つは猿と犬との間柄の如き、犬と雉との間柄の如き、元是れ吳越敵視の關係なれば、相互の調和到底行はる可くもあらず、終に一大争鬪を起し、犬は逸早く雉を噛み殺し、其生血淋漓たる雉肉に舌を鳴らし居る隙を視ひ、猿は桃太郎の太刀を抜きかざし背後より一刀兩斷に斬り下げければ、流石の犬もだますに手無し、ワンとも云はず息絶えたり、猿は大に喜び、我時來れりと爲し、桃太郎の遺物は勿論、爺が山に樵りし斧、婆が川に濯ひし鹽、日本一の黍團子を作り



たる器械等一切、鬼ヶ島戦利品の寶物とを併せて自己の所有と爲し、桃太郎二世と號し、意氣揚々たりしが、此報鬼ヶ島に傳はるや、鬼の王は直ちに召集令を發して群鬼を會し、宣して曰く、桃太郎勇猛無双、眞に畏る可きの人物、しかも今や亡し以て我が心を安んずるに足る、しかも尙ほ彼の犬の勇烈なる、雉の翱翔自在なる、侮る可きの敵にあらざりしも、是亦た鬪牆の禍に斃れ、今や彼臆病なる猿の天下と爲り、桃太郎二世と稱すと聞く、彼猿奴多少の智慧なきにあらざると雖、畢竟是れ猿智慧のみ、與みし易しとす、汝群鬼克く我旨を領し、速かに彼土に渡り、我島唯一の寶物を取返し來れど、

群 鬼命を奉じて海を渡り、猿を殺して、其肉を膾にし、其皮を剝ひて褌を製し、以て虎皮に擬す、桃太郎の天下は二世にして亡びぬ、首領を失ひたる小豪傑の團體は危い哉。



盜賊新聞（卅三年十二月稿）

六二

社説

盜賊諸君の再考を煩はす

彼、駭々たる者は社會進步の潮勢に非ずや、其、轟然として邁往する所、金城湯地堅しとするに足らず、泰山喬嶽高しとするに足らず、頂籍呂布勇なりとするに足らず、張良陳平智なりとするに足らず、忽ち碎けて齏粉と爲り、忽ち潰れて泥濘と爲る、十九世紀の夕陽再び招く可からずして、二十世紀の

曙光は天の一方に現はれ來る、此時に當り苟も社會の局面に立ち大事を爲さんと欲する者、豈舊套を墨守し、進歩に後れ、大方の嗤笑を招くの愚を、之れ演じて可ならんや、

政治社會は已に三百諸侯參勤交替の時代を過ぎぬ、法曹社會は已に町奉行不淨役人の時代を過ぎぬ、教育社會は已に寺小屋商賣往來の時代を過ぎぬ、實業社會は已に農工商を四民の下位に置くの時代を過ぎぬ、文學社會は已に勸善懲惡の小説漢詩和歌に古人の口吻を學ぶをのみ事とするの時代を過ぎぬ、争ふて歐米諸國の新智識を應用し、帝國をして列國競争の牛後に落ちざらしめんことを期せり、盜賊社



會にして獨り此進歩に伴はざるの理萬々之れ無きを信ぜんとす、

六四

而して我親愛なる盜賊諸君は果して能く其進歩に伴ふの行動を爲しつゝあるか新日本の盜賊たる躰面を維持する丈の行動に出でつゝあるか吾人は遺憾ながら其然らざるを斷言せんとす何となれば諸君が今日盜賊としてしの行動を見るに主として舊套を墨守するに汲々し或はカルトシの殘唾を啜り或は盜跖の餘風を慕ひ或は石川五右衛門の遺跡を襲ぎ則ち墻を越へ壁を穿ち黑夜刃を揮ふて童弱を脅し寂寞人跡を絶つ所の往來の人を要して其財物を掠

む等の舉に出づるに過ぎず毫も新日本の盜賊として耻かしからざる的新方法を講ずるを見ず何ぞ其進取的思想に富まざるの甚しき吾人が慨して慊せざるを得ざる所以なり、

勸むる者は教ゆるの義務を有す吾人は親愛なる盜賊諸君に向て所謂新方法なる者を授けざる可からず諸君よ坐せ謹んで吾人の説く所を聽け請ふ見よ世上幾多の紳士と稱し紳商と稱する者の爲す所を其表面や甚だ美に其方法や甚だ巧みなりと雖其主義目的に至つては多く諸君の爲す所と差異ある無し而して裁判所之を如何ともする能はず、



警○察○之○を○如○何○と○も○す○る○能○は○ず○偶○々○誤○つ○て○諸○君○と○同○一○轍○の○  
未○路○に○陥○る○が○如○き○こ○と○な○き○に○あ○ら○ざ○る○も○要○す○る○に○證○據○不○  
充○分○て○ふ○名○の○下○に○晴○天○白○日○の○身○と○爲○る○を○常○と○す○則○ち○社○會○  
の○上○流○に○立○ち○萬○人○の○尊○敬○を○受○け○肥○馬○に○乘○り○輕○裘○を○着○醉○ふ○  
て○は○綺○樓○の○紅○粧○に○戯○れ○覺○て○は○朝○野○の○政○柄○を○握○る○之○を○諸○君○  
が○平○常○舉○止○戰○々○兢○々○と○し○て○影○に○怯○ぢ○幻○に○恐○れ○美○食○美○な○ら○  
ず○暖○衣○暖○な○ら○ず○し○か○も○遂○に○天○網○に○陥○り○蓆○衣○鐵○鎖○囹○圜○に○泣○  
く○の○運○命○を○免○か○れ○ざ○る○も○と○其○得○失○果○し○て○如○何○ぞ○や○  
寄○願○す○我○敬○愛○な○る○盜○賊○諸○君○諸○君○は○學○事○を○抛○棄○す○勿○れ○新○日○  
本○の○新○智○識○を○攫○收○す○る○に○躊躇○す○る○勿○れ○而○し○て○速○か○に○立○身○

出○世○し○て○人○に○羨○ま○る○の○好○地○位○を○占○め○警○察○裁○判○所○の○力○の○  
及○ば○ざ○る○區○域○に○於○て○白○晝○公○然○其○事○業○に○従○事○せ○よ○以○て○新○日○  
本○の○盜○賊○た○る○本○領○を○發○揮○せ○よ○昔○者○遠○山○左○衛○門○憲○臺○の○椅○子○  
に○在○り○盜○賊○の○獄○を○斷○す○る○に○當○り○冷○語○を○放○つ○て○曰○く○汝○至○愚○  
な○り○何○ぞ○肩○衣○を○掛○け○て○盜○賊○を○爲○さ○い○る○や○と○一○句○の○金○言○千○  
秋○の○下○煌○々○と○し○て○永○く○斯○道○の○鐵○案○た○り○嗚○呼○我○親○愛○な○る○盜○  
賊○諸○君○吾○人○を○以○て○不○可○能○事○を○喋○々○す○る○者○と○爲○す○勿○れ○陳○言○  
一○則○薦○め○て○以○て○諸○君○の○再○考○を○煩○は○す○



○自轉車と玉の捕縛

有名なる女盜賊自轉車と玉は本日捕縛せられたり、常盤座の壯士演劇に於て捕縛せられたるが如く傳へしは誤報に近し(十二月二日午前八時十分人民新聞社發電)

○故生首正太郎氏の百日祭

時事新報社の配達小僧小説類書籍販賣書林貸本屋等有志家の發起にて近々の内故生首正太郎氏の百日祭を執行する由(十一月三十日午後六時三分愛讀社發電)

○稻妻強盜遺物展覽會

豫て報じたる稻妻強盜遺物展覽會は愈々本日より開會せり開會式は頗る盛大を極め出席者亡慮八百人以上に達すと茨城通信に見えたり(全上)

○鼠小僧二百年祭

京都に於て石川五右衛門三百年祭を執行したるを聞き東京に於ても負けぬ氣に爲り近々鼠小僧二百年祭を執行する由(十二月三日保白社發電)



●石川五右衛門氏三百年祭詳況 本紙上に於て屢々報導したる石川五右衛門氏三百年祭は彌々去十月二十五日を以て京都四條河原に於て執行せらるる参拜列席者は同地の紳士紳商を始め鍬切り巾着切り押込み追剥ぎ等殆んど數千人に及ぶ祭典は午後二時より始まり導師は五臺山文珠寺の花和尚魯知深師にして僧侶十八人同音讀經の聲は天地も轟くばかり閻魔大王地藏菩薩も膽玉をアングリ返やすかと疑はれ参拜者爲に耳を聳したり讀經終りて参拜者

總代の祭文明讀あり次に導師以下参拜者一同焼香を爲し次に一同に茶菓を饗す菓子は千鳥の香爐を摸して作りたるものにして之に『石川や濱の眞砂は』云々の和歌を彫し人をして懷舊の念に堪はざらしめぬ當日は近來の好天氣にて参拜者頗る多く式場を圍んで露店を張り不時の儲けを爲したるものも少なからざりしと云ふ左に同日靈前に手向けたる詩歌及び参列者總代の祭文を掲ぐ

祭石川五右衛門君文 熊 阪 長 吉

月日某謹て清酌庶羞の典を以て石川五右衛門君の靈を祭る君は盜界の聖人、賊黨のヒーロー、泥棒仲間のチャン



ピョ、ン、ナ、リ、當時を按するに、元龜の春、天正の秋、足利氏綏  
 を解き柄を失ひ、天下紛々亂れて麻の如し、吉法帥空く賊  
 臣の刃に罹り、竹千代猶ほ雌伏するの時に當り、猿面冠者  
 不出世の雄姿を以て、東攻西伐、撥亂反正、戰ふて捷たざる  
 無く進んで取らざる無く、竟に海内を一統し、武を絶域に  
 用ゆ、天下の勇將猛卒、争ふて之に倣ひ、驥尾に附して封侯  
 を求む、敢て他の奇を出だす者を見ず、僅に原田孫七郎、魚  
 屋助右衛門、曾呂利新左工門、船頭與次兵衛及び君の在る  
 有りて封侯以外別に頭地を出だすを見るのみ、而して原  
 田、魚屋の徒は皆猿面に追隨して奇功を建つるもの、曾呂

利に至りては一個の高等幫間、只だ東方朔的滑稽を弄し  
 て宮中府中の調和を畫る決して丈夫的本領にあらざる  
 なり、獨り與次兵衛の博浪の鐵槌漢に報じて成らずと雖、  
 天下皆震動するの概あるを多しとするのみ、而して君に  
 至りては更に大なる者あり、大悟徹底、塵世雲烟に附し、虛  
 爲の道德、表面の正義を銜ふを屑しとせず、則ち赤裸々を  
 以て社會の表面に活歩し來る、白日公然盜を爲し、人を殺  
 し財を奪ひ、富豪の貪婪を削り、貧人の窮困を補ふ、一も自  
 ら利する所無し、其清廉にして潔白なる、彼私利の爲めに  
 蒼生を干戈の間に驅り、以て人の城を攻め、人の國を奪ふ



の徒に比して、其人物の高下迥然類を別するを見る、一朝殺生關白の知を被り、匕首を懷にして聚樂に入り、荆軻轟政の事を行はんとす、天運會せずして忽ち驟き、楚囚其冠に纏し、鼎鑊甘きと飴の如しと爲す、其累を知己の人に及ぼさず、自ら千鳥の香爐を奪ふの汚名を甘んじ、從容死に就くに至りては、正氣凜々として、天地の間に塞る千歳の下永く後人をして興起せしむ、堂々たる豊臣大閥を罵りて、織田の天下を奪ふの大盜と作し、爲めに釜煎の酷刑を招きしといふに至りては、怯懦矇昧の歴史家の言ふ能はざる所に言及するの一大快語として、余輩の艶稱して已

む能はざる所たり、其絶命の詞に曰く、石川や濱の眞砂は盡るとも世に盜人の種は盡きまじと、果して然り、萬古不磨の金言、孔孟耶馬と雖、曾て道破せざりし所なり、君の如きは實に盜界の聖人、賊黨のヒーロー、泥棒仲間、チャンピオンたるに耻ぢざるなり、君の前に熊阪長範あり、君の後に鼠小僧次郎吉ありと雖、是れ先驅後警の員に備はる者にして、或はエチプトモセスたり、或はマーチンルーテルたるに過ぎざるなり、而して君今や則ち亡し矣、哀哉、悲風蕭々として、鴨水を吹き、四條川上水禽鳴く、尙くは魂髯髯として來享せよ、



湯、鏝、是、飴、刀、鋸、蜜、霸、王、城、中、膽、如、天、拂、雲、三、尺、報、知、已、慷、慨、趣、  
義、真、可、憐、月、白、鳧、鴨、川、上、夕、大、盜、回、首、又、神、仙、

國風一首

高橋傳子

石川や濱の眞砂の月影に

白きは黒きこゝろなりけり

其他祭文詩歌等の手向けられたるもの多かりしも紙面の都合によりて掲載せざることゝなしぬ

●泥棒同志倶楽部の組織 大に泥棒社會の改良を計るの目的を以て國定忠次、神道德次郎、大阪喜八、日本左衛門等の

元勳連を始めとして清水定吉、田中正太郎の青年發起となり今度泥棒同志倶楽部なるものを組織し數日前發起人會にて左の規約を決議せり、

第一條 本倶楽部を泥棒同志倶楽部と稱す

第二條 本倶楽部は泥棒社會の改良を計るを以て目的とし風儀を矯正し然諾を重んじ苟も違約背徳等の行爲あるを許さず

第三條 本倶楽部に左の役員を置き盜務を掌らしむ

幹事 二名 評議員 四名

第四條 本倶楽部員たらしんとするものは強盜竊盜拘摸



監守盜詐偽取財等の所行を爲し得るの資格を具し幹事に申込むべし

### 第五條

捕縛せられ處刑せられたるものは本俱樂部に於て名譽の失敗となし之を頌表するに吝ならずと雖自首改心等の結果盜務を廢止したる者は之を破廉耻者と見做し除名處分を爲す

投票の結果清水田中の二氏幹事に國定、神道、大阪、日本の四氏評議員に投選したり因に記す近日迄東京市參事會員たりし峰尾某等も都合によりては俱樂部員に加盟する筈にて其他各地方に於ても官吏議員銀行員等に追々加盟者あ

るべく本俱樂部の隆盛は日を期して待つべしと俱樂部員の一人は語れり

●泥棒同志婦人會の演說會 泥棒同志婦人會は會長鬼神松子を始め幹事高橋傳子鳴神新子諸嬢の熱心なる盡力にて漸次會員を増加したるに付き今回一層盜務擴張の爲め公開演說を開くことゝ爲り去る一日を以て神田錦輝館に於て泥棒同志婦人大演說會を開きたり聽衆亡慮三千人に及び警官は辯士の身の上を取締ると同時に聽衆の取締りを爲すが爲め非常に繁忙なるやに見受けたり定刻に至れば幹事高橋傳子嬢登壇して『開會の趣旨』を述べ新會員自轉



車玉子嬢を満場に紹介せり、次に自轉車玉子嬢は拍手響裡に登壇し、嗚呼社會の制裁といへる演題にて痛快なる演説を爲し、頗る満場の同情を動かしたり、次に幹事鳴神新子嬢は『彼背徳者島津某』てふ演題を掲げ、改心と銘打て地方に演劇興行を爲し、愚民を迷はし居る島津お政を攻撃せり、次に般若作子嬢登壇し、『婦人は盜賊たらざる可からず』と題し、過激なる演説を爲し、警官の注意を受け、題意を満足に辯ずる能はずして降壇せり、次に登壇せしは木場犀子嬢にて、『婦人と盜賊との關係』と題し、解剖的の演説を爲し、ぬ最後に登壇せしは會長鬼神松子嬢にして、『妾をして此に至らしめたる

ものは誰ぞ』と題し、慷慨悲憤の口調を以て時流の弊風を指摘し、論去論來叱咤風生とも評し、つべく拍手大喝采の下に降壇し、無事散會を告げたるは、午后五時過なりし辯士一同は相率て午餐を共にし、夫より各々盜務に従事したる由當日の辯士中割合に上出來なりしは、自轉車玉子嬢にして、『私はモ、明日あたりには捕縛せらるゝ都合でありますれば私の今日の演説は所謂最後の演説でありまして、私は獨り人民新聞の愛讀者と訣別するのみならず、満場の諸君とも訣別せねはなりません』と説き來りし時の如きは、満場水を打ちたる如く大に聽衆を感動せしめたり、左に會長鬼神



松子嬢の演説筆記を掲ぐ

八二

満場の諸君妾は鬼神のお松でございます泥棒婦人會擴張のことに就きましては已に最前より皆さんから申上げました通りにて更に妾が喋々辯ずるを要しません妾はこゝに妾をして此に至らしめたる者は誰ぞと題し一場の演説を試み諸君の御清聴を汚すのでございます(謹聴)諸君は女盜賊などといへば甚恐ろしき者であらうと思はるゝであります(然り)と呼ぶものあり(然るに豈圖らんやこの通りの優しい通常の女であります(外面如菩薩と呼ぶものあり)成程諸君は外面如菩薩内心

如夜叉と佛家の語を以て御批評なさるゝのでございませうが決して妾等とて腹からの盜賊ではございませんヤハリ立派な良家の娘でございます最前自轉車お玉さんが御自身の經歷を御陳べになりましたが恰も妾の經歷と符節を合するが如し恐らくは自轉車お玉さんは妾の經歷を明治流に行ふた方ではないかと存じます、最初藝妓を勤めて居たことや男の爲めに初めて盗みをしたことや特に最後に至り永く別れて居た可愛い男を定まる女房の手から奪ひ夫れがため足が附いて捕縛になりましたところなどは酷だ似て居ります之は嘗てたし

八三



か毎日新聞でありました骸骨お松と題し妾の経歴が出て居りましたので諸君は御承知の事と考えます(人民新聞に問合すべしと冷やかすものあり)が左様な餘事は枝葉に渡りますから申しませぬこととして自轉車お玉さんや妾の経歴が終に女盜賊とまで陥りましたのは要するに社會の罪でございませう諸君は今日の社會の狀態特に婦人の狀態を御覽になりました妾等の行爲を罪惡など、斷言なさるゝことが出来ますか否社會は妾等を以て惡人と明言し得るの資格がありますか世上幾多の婦人が男子を感はして金錢を貪るは罪惡ではありません

んか紳士紳商などいふ連中の細君令嬢等が其夫及び其父の目を掠め金錢を持出して俳優狂ひを爲すが如きは貞操を破り盜賊を行ふものにして極重惡人といふて可なりであります(喝采)特に藝妓娼妓の輩に到りては錦着たる疊の上の盜賊であります(ヒヤ)而して彼等には自由廢業の恩典にて廓を抜け出すことがありますに拘はず妾等盜賊は自由廢業の特典を以て監獄より救出すことは出来ません豈不公平の甚しきものではありませんか(拍手喝采)人生れながらにして誰か泥棒の心の無いものがございませう失敬ながら滿場の諸君の如きも



皆泥棒の心は持つてお出でしあらうと信じます（ノウ  
 く）然れど幸にして御教育があらせられ或は社會の壓  
 制に抵抗する程の勇氣が無いからして悪人となるのが  
 出来ない已むを得ず善人ともなり良妻貞女ともなりて  
 満足なされるのでございませう（ノウく）最も其所謂良  
 妻貞女も眞正の良妻貞女ならば妾等も双手を舉げて贊  
 成する所でありますが（君等に贊成を受けなくて善いと  
 叫ぶものあり）多分は意氣地無し御人よしを以て良妻  
 貞女となす傾があります妾の考へますには少しく意氣  
 地ある女ならば社會の壓制詳しくいへば男子の壓制に

抵抗し得る女ならば女丈夫マンダーク或はシヤルロ  
 ットコルデー乃至鏡山のお初と爲ること能はずんば寧  
 ろ女盜賊と爲るであらうと信じます何となればこの妾  
 の如きも諸君御存じの如く最初盜賊を働きましたは所  
 天傳次が金錢に差問に難義を爲るを見るに忍びなかつ  
 たからであります自轉車お玉さんが情夫の爲めにした  
 のとは譯が違ひます立派な亭主の爲でございしました又  
 人殺をしたのも夏目四郎三郎は親の仇であります自轉  
 車お玉さんが世話に爲つた田舎大盡を毒害したのとは  
 譯が違ひます乍併お玉さんとして要するに其情夫の善チ



ヤンとか清チャンとかの爲めに誠を盡された結果で特に其善チャンには飽まで不義理をされながら愛情を變えず其零落を見て之を助け仇を恩で酬ゆるなどは適れ見上げた心底であります眞に我會に於ける將來有望の會員たるに耻ぢない彼世上の奥さん嬢さん杯が到底企て及ぶ所ではありません只其誠を盡すことが飽まで執拗きに拘はらず社會がアマリに冷淡でありますからして終に激して盜賊或は毒婦とも成る次第であります兎角世間の男子といふ奴は不義理不人情極まる者にて女子が窄き胸に至誠を盡し終に溝壑に縊るの境界に陥る

を傍觀し番に傍觀するのならず之を呼ぶに女盜賊毒婦等の惡文字を以てするのであります妾等何ぞ之に向て一大運動を試みずに居られませうか即ち妾等をして此に至らしめたのは社會であります男子であります滿場の諸君妾等と感を同ふせらるゝ滿場の諸君妾等の心事に一滴同情の涙を灑がるゝならば來つて此泥棒同志婦人會に加盟あらんことを伏して希望する所であります  
(拍手大喝采)

●紳商の履歴と小僧の處刑　こゝに名も白何町のウソ八百番地に住む紳商慾野奸兵衛(五十四年)といへるは青年の



時より狡智に丈けたる男にて、慾野といへる富豪の店に奉公し奸才を以て主人に取り入り終に主人の秘藏娘お何といふを盗み嬉しい中じやないかいなど洒落ちらし結果マシマと首尾よく聳養子と爲り終に奸謀を逞うし主人の財産二百萬圓餘をスツカリ自己の所有と爲し恩の有る養父母を虐待し終に戸主の權利を濫用し之を追ひ出したり聞く人之を憎まぬは無し然るに此家に四ツ五ツの頃より奉公せる忠吉(十四才)といふ小僧ありしが此程不圖出來心より主人の金一錢二厘を以て燒畷を買ふて喰ひ屁を放りたる音のいつか主人の耳に入り小僧を捉へ屁の原因を糾回

し其實狀を得て無慘にも年來の奉公を水中の放屁と見做し警察署に訴え出で終に検事局送りと爲り正式裁判を開かれ可哀相にも小僧は輕禁錮二ヶ月に處せられ耻を柿色の衣の袖を絞り主人の無情を怨み居るとなん

盗事片々

▲聖人 死せずんば大盜已まずと玄々先生の痛語今や聖人死して小盜陸梁功名富貴に齷齪たり大盜求む可からず  
▲只江 上の清風と山間の明月と之を取れども禁する無しと蘇東坡呻る斯風流漢聊か盜心有り細君の斗酒頗怪し



時より狡智に丈けたる男にて、慾野といへる富豪の店に奉公し奸才を以て主人に取り入り終に主人の秘藏娘を何といふを盗み嬉しい中じやないかいなど洒落ちらし結果マシマと首尾よく聳養子と爲り終に奸謀を逞うし主人の財産二百萬圓餘をスツカリ自己の所有と爲し恩の有る養父母を虐待し終に戸主の權利を濫用し之を追ひ出したり聞く人之を憎まぬは無し然るに此家に四ツ五ツの頃より奉公せる忠吉(十四才)といふ小僧ありしが此程不圖出來心より主人の金一錢二厘を以て燒畧を買ふて喰ひ屁を放りたる音のいつか主人の耳に入り小僧を捉へ屁の原因を糾回

し其實狀を得て無慘にも年來の奉公を水中の放屁と見做し警察署に訴え出で終に検事局送りと爲り正式裁判を開かれ可哀相にも小僧は輕禁錮二ヶ月に處せられ耻を柿色の衣の袖を絞り主人の無情を怨み居るとなん

盜事片々

▲聖人 死せずんば大盜已まずと玄々先生の痛語今や聖人死して小盜陸梁功名富貴に齷齪たり大盜求む可からず  
▲只江 上の清風と山間の明月と之を取れども禁する無しと蘇東坡呻る斯風流漢聊か盜心有り細君の斗酒頗怪し



▲**收斂** の臣あらんより寧ろ盜臣あれど古人の金言妙ハ  
 イカラ一有らんより寧ろドロボ一あれ是れ吾人の金言奇  
 ▲**水滸** 傳百八人悉く泥棒なり貫仲之に冠ずるに忠義の  
 二字を以てす泥棒眞に忠義なり夫を兎や角いふ後人野暮  
 ▲**泥棒** は泥棒なり忠義は忠義なり泥棒にして忠義なる  
 者無きを保せず否寧ろ最も多く之有り泥棒は偽善に非ず  
 ▲**盜島** 田一郎大久保利通を噎し盜西野文太郎森有禮を  
 斬り盜來島恒喜大隈を傷く是れ史筆の所謂盜盜字不可侮  
 ▲**盜跖** 壽にして顔回の天なるを怪しむ勿れ跖や肉食滋  
 養に注意す回が練味噌汁の類にあらず旨い者喰はぬは損

▲**盜賊** を捕えて繩を緲ふ者あるを笑ふ勿れ世には今日  
 になりて武士道の講釋を始むる者あり武士道壞敗日久し  
 ▲**武士** 道の棄つ可からざるは明治初年より分つた話な  
 り今日の士風壞敗は武士道を棄てた報後悔遲時の唐辛子  
 ▲**泥棒** を捉て見れば我子なり收賄者を探訪して見れば  
 我親方なりの場合には實に苦しからん御役目御察し申す  
 ▲**ドロ** ンと消ゆる故に泥棒といひトウ／＼と得意で押  
 込む故に盜賊といふ古事成語考に出づとは何だか嘘らし  
 ▲**嬌態** の美人多きが故に京都といひ嘔吐を催す様な輕  
 薄子多き故に大阪ならば盜賊多き故に東京と稱する者か



▲興論の代表者たる新聞紙が如何に吾曹盜賊に同情を表しつゝあるかを見よ試に近刊の分に就て一二を挙げば

▲時事には生首正太郎を連載して購讀者の大喝采を得たりとて味ひ付き更に小旦那藤三なるものを連載し始む

▲日々の續き物を見よ邑井一得意の講談日本左衛門にして放火人殺日々改る俠盜の痛快なる言行愈出て愈奇

▲人民は申す迄もなく井原青々園の著作自轉車と玉にて大喝采を博し壯士芝居に演せらるゝに至りて大得意也

▲其他吾曹に同情を表する新聞舉げて數ふ可からず是吾人が盜賊新聞の發刊を敢てし斯道の爲に氣を吐く所以

▲加之 其三の面記事なる者は熱心に探訪の結果吾曹の痛快なる活潑なる行動を日々傳えられ日々埋めらる多謝

▲東方 朔は桃を盗みて九千年の齡を保ち陸績もソソな事をして二十四孝に入る盗みも時に妙チヨコ／＼やるか

▲詩人 文人古人の句を盗み畫家は古人の筆意を盗み小説家は古人の趣向を盗み秋劍は泥棒を盗む泥棒の世の中

▲姦夫 は人の妻を盗むものを謂ふ借問す人の娘を盗む者は罪なきか今人の結婚多く此盗み方自由結構と名づく

▲盜鉤 者有誅盜國者封侯と唐人中々甘い事を謂ふ何ぞ上下を着て盗まざると名奉行の名言今はフロックコート



▲文字 反古の記者井上秋劍なるもの克く口眞做を爲して世を諷す亦是れ盜の一種なりといはれ筆を投てムニヤ

評 林

盜盜盜

梁 上 君子

盜盜強盜竊盜舉世盜獨不盜英雄是盜聖人亦盜掠財是小盜奪國即大盜佛戒飲酒偷盜孟客鷄鳴狗盜堪憐小盜嘲大盜由來人間渾是盜

寄 書

巡查を廢すべし

牛込 黒 闇 生

古來私利を貪る者の國害を爲すは免れ難きの弊なり公私吏人其他會社に立ちて事を爲すもの其多くは國家の爲めに盡すと稱して私を營む者なり就中巡查の如き兵士の如き此等の中に於て私利を營むと薄く國民の爲めに盡すと厚き者なり而して兵士は國家の干城一日も之を廢すべからずしかも猶ほ弭兵會議を首唱し軍備編少を唱ふるものあり終に戦争廢止論を學説として論するものあるに至る



蓋し社會の文明に進むに従ひ免かるべからざる事なりとす  
 巡査は泥棒を防ぐ者なり然れども巡査中徃々私利を逞  
 ふする者あり否手柄を爲して早く昇進せんと冀ふものあ  
 り此輩目を皿にして泥棒らしき行爲ある者は之を捕はて  
 己の手柄とす是れ泥棒を防ぐにあらずして泥棒を増加す  
 るものなり故に余輩は思ふ之を救ふに一策あり先づ現今  
 の巡査を廢し泥棒をして泥棒を捕はしめ之を罪せずして  
 巡査の如き役目を授け以て他の泥棒を捉へしむべし泥棒  
 日を追て減せん是上策にあらずや或人難して曰くしかす  
 るときは社會は泥棒を以て充たさるゝるに至らんと余輩

答にて謂はんとすしかなさゝるも社會は己に泥棒を以て  
 充たされ居るなりと聊か所感を述へて貴社に投ず編輯者  
 諸君希くは採用あれ

廣 告

泥棒候補生募集

今十二月より二十二日間泥棒候補生の募集を爲す志願者  
 は履歷書相添へ本校長宛にて願出づ可し

十二月十日

泥棒養成學校



泥●棒●器●械●割●引●大●販●賣●

弊會社今般開業以後一千九百年に相當するを以て祝意を表する爲め泥棒器械即ち忍裝束黒頭巾手拭小鋸罐ナイフ刀劍出刃庖刀龕燈繩梯子等其他新發明泥棒用の器具當分の内貳割引を以て販賣す御用の御方は續々注文あらんことを

泥●棒●用●器●械●製●造●株●式●會●社●

泥●棒●御●禮●

昨夜は不圖戸締不用心に致置候處不思掛御訪問を辱ふし

金錢珠玉衣類道具等種々御持歸り被成難有存候一々罷出御禮可申等之處跡始末彼是取紛れ候に付き乍略義以新聞紙上御禮如此候

十二月八日

尾●樋●豊●志●



# 放蕩學會雜誌

1011

本領

## 發刊之辭

佳人半醉、美女新粧、月下に瑟を彈じ、石邊に酒に侍す、雪を烹るの茶、果して然り贖して、寒香あり、春を争ふの館、自ら是れ花歎を來すに堪へたり、人間の行樂、豈色情に超ゆる者あらんや、世上の愉快、誠に放蕩に勝る者無し、振袖のちらと見えけり、闇の梅、一十七字轉た才子の情懷を傷ましめ、戀せずば

人の心もなかるべし、物のあはれは是よりぞ知る、三十七字坐るに佳人の嬌魂を惱ます、卓王孫有女、文君新寡、好音相如、謔與令相重、而琴心桃、既罷、文君夜奔、相如與馳歸、成都を讀で銷魂せざる者は其人必ず狂妄、二八佳人巧様粧、洞房夜、夜換新郎、一雙玉手千人枕、半點朱唇萬客嘗、傲盡幾般嬌體態、妝成一片假心腸、迎新送舊、知多少、故作相思淚、兩行を誦して、斷腸せざる者は其人必ず陋愚、絶代の姦雄釋迦をして、外面如菩薩を説かしめ、邪淫戒を設けしめたるも、達摩さんこちら向かん、世世の中は月雪花に酒と三味線の一喝に、粉細微塵に碎くるにあらずや、千古の大俠耶蘇基督として、爾姦淫の心

明治大諷刺

1011



一〇四  
を以て人の妻を見れば、爾姦淫を犯したるものなりと教戒  
を下さしめたるも、私にはあなたを愛しますラフは神聖であ  
ります、神様は我々の戀中を御守りなさるで有ませうと教  
會を淫賣俱樂部と心得る墮落傳道師の爲めに滅茶苦茶と  
爲り了るにあらざや、戀愛の勢力何ぞ其れ大なる而して其  
戀愛の意志をして充分に活動せしむるもの之を名づけて  
放蕩學と謂ふ入り易くして至り難く、宛然禪を學ぶが如し  
然れども一たび其堂に上らんか、一擲千金、渾べて是れ、膽百  
媚一笑、皆金と爲る、親爺の異見、河童の屁、友人の忠告、馬耳の  
風、貧育の勇、暫時に挫け、陶朱の富一朝に空し、大厦、高樓、烟散

霧消し、富貴功名論ずる所に非ず、盛なる哉、しかも樂其中に  
在り、大丈夫須らく學ばずんばあるべからず、吾人此に感ず  
る所あり、曩に放蕩學協會を起し、綠意紅情、研鎖日もこれ足  
らず、同志の士來り會する者數千人、日ならずして、一大團體  
は成立せり、夫れ團體あり、機關なかる可からず、乃ち發起し  
乃ち贊成し、雜誌發行の議、茲に定まる、竟に、今月今日を以て  
本誌を發行すること、なれり、吾人驚なりと、雖誓て、斯學の  
流行に勉め、斯學の爲めに、靖献するを辭せざるべし、語を寄  
す、世上幾多、弄柳拈花の才士、瞻雲望月の佳人、來て、吾人と共  
に、せよ、心曲を燒く、の悲火、豈之を消するの水なからんや、眉



突を壓するの愁雲、豈之を拂ふの風なからんや、

一〇六

論 説

### 戀愛平等論

放蕩博士 今野丹次郎

平等一切の語、釋迦豈之を言ふの權利あらんや、彼は後宮三千の美人を棄て、山に入りて去りたる者なり、自由平等の字、ルソー却て之を筆にするの權利を有す、彼は大學者の身を以て旗亭の賤婦と結婚せり、然れども眞に平等の行を爲すに至りては彼と雖も未だし矣、波羅門の四階級を破壊

したればとて、俄かに以て平等の實に達したりとすべからず、佛蘭革命の爆列彈を製造したればとて、直に見て平等の實を擧げたりとすべからず、階級は再び作らるゝなり、政權は或は奪はるゝなり、此時に方て平等の文字は只其虚位を守るのみ、獨り戀愛の一事に至りては、貴賤無く、上下無く、老幼無く、貧富無し、自他の差別無く、倫常の制裁無し、其平等は永遠なり、其自由は無限なり、漢帝は飛燕を梨園に擧げしに、わらずや、貴妃は祿山を愛せしに、わらずや、道長は式部を口説きしに、非ずや、なにがしの君は定家を師としたまひしに、わらずや、お染は久松を愛せしに、わらずや、長柄長者の娘は



鶯塚の乞食を慕ひしに、あらずや師直は顔世に艶書を贈りしに、あらずや勘平は主人の大事をも知らざりしに、あらずや或は在五中將と爲り、或は光源氏と爲り、或は一代男の世之助と爲り、或は唐琴屋丹次郎と爲る、彼等か戀愛界に於ける沈痛爽快なる行動は、如何に後の青年血氣者をして、踔厲風發奮興起舞する所あらしめしぞ。古人が放蕩學に於ける赫々の偉績見る可き也、而して其特に貴ふ可きものは其社會階級の甚しき時代に於て、獨り平等の戀愛界に存するを證明せんと力めたるに在り、戀に上下の隔て無しとは専ら此人々が、以て理想となせし格言にして、實に千古の鐵案な

り、我に自由を與へよ否らざんば死を與へよと、絶叫したる米國建業の志士は、夙に戀愛界にのみ自由平等の存在せしを知らざりしなり。千金を以て貴人に購はるゝも之に應ぜざりし賤女は、パトリックヘンリーに比して何等の遜色か有る、贖佳人、佳人、擧、大守、媿、妾身、任、君、殺、妾身、任、君、生、妾、有、阿郎、在、妾、心、不、可、頓、鬢、髮、在、手、亂、如、絲、木、蘭、舟、中、斬、蛾、眉、遺、恨、不、知、深、幾、尺、三、叉、之、水、終、古、綠、之、を、十、三、州、獨、立、の、檄、文、に、比、し、て、何、等、の、遜、色、か、在、る、偏、に、功、名、の、邪、道、に、走、り、て、却、て、戀、愛、の、正、路、に、遠、か、り、親、爺、の、異、見、に、尻、込、な、し、友、人、の、忠、告、に、赤、面、す、親、愛、な、る、情、人、を、棄、て、厭、惡、な、る、女、子、と、婚、す、る、の、徒、禁、足、坐、敷、牢、勘



當、禁治産、廢嫡等あらゆる壓制の爲めに、其平等自由を破壊せられ、盲従し、雷同し、得々たり、洒々たるの輩、豈能く此間の消息を解せんや、世に阿世の徒あり、漫りに吾人の言を駁して曰く、戀愛は惡徳なり、放蕩は汚行なり、釋迦は大聖人なり、過を悔いて善に遷れり、ルーソーは學者なり、而も彼の品行は彼の人物をして三文の價值なからしむ、階級は立國の本なり、平等は亡國の基因なり、結婚は門地を論ぜざる可らず、牛は牛連れ馬は馬連れならざるべからず、提灯に釣鐘つり合はぬは不縁の本なり、貴の賤に戀し下の上を慕ふは不義なり、漢帝は暗君なり、貴妃は驕妃なり、道長、定家、お染、長者

の娘、師直、勘平、皆論するに足らざる者なり、在五中將は漁色將軍、光源氏は好色大臣、世之助は馬鹿者なり、丹次郎は阿房なり、彼等の行動は社會の風教を害せり、毒を千歳の後に流せり、ヘンリーは三浦屋の高尾よりも英雄なり、功名の爲めに戀愛を捨つるは丈夫の事なり、父に順ひ、友に聽き、情人を以て立身出世の犠牲と爲すは男子の行なり、勘當、廢嫡を恐るゝの息子は過を改むるの君子なり、禁足、坐敷、牢を愧づる人間は臍面を重ずるの紳士なりと、それ然り、豈に夫れ然らんや、彼論者の如きは少かに其一を知て、未だ其二を知らざる者なり、請ふ次號に於て大に論ずる所あらん、(未完)



放蕩學會雜誌の發刊を聽て感あり

放蕩學校教授 紙屋治兵衛

誰か放蕩を以て惡徳と爲す、人の生るゝや幼年時期暫らく論ぜず、少年時期を過ぎて青年時期に入るや、血氣正に盛にして、之を抑ふれば益々揚る、志は冲天に在り、未だ飛ぶことを肯せず、日夜螢雪の窓に勞し、且暮梁錐の苦を嘗む、此時に當り若し鬱屈の氣を伸ばすの地を與へざらんか、乃ち病まざれば狂せん、之を防ぐは只放蕩の一事あるのみ、孟子曰く

我れ能く我浩然の氣を養ふ、何ぞ放蕩を勸むるの辭ならざるを得んや、而して放蕩を以て一種の科學と爲すは、近來に始まる、余乏きを放蕩學校教授に受く、常に斯學の隆盛を希ひ、彼學半にして二豎に犯さるゝ幾多の少年子弟をして、唯一養氣の術を會得せしめんとする此に年あり、今放蕩學會に於て雜誌刊行の舉あるを聽く、何ぞ雀躍欣喜せざるを得んや、新柳二橋月恰も圓なり、吉原新宿花正に好し、青年諸員奮ふ所あれ、經に曰く明哲身を保すと、豈他あらんや、

經濟界より看察せる放蕩學

放蕩學士 小莊吉三郎



放蕩學の隆盛が經濟界に於ける金融の流行を助くる少からざるは吾人の言を待ざる所にして、如何に頑陋なる拜金主義の守錢奴と雖も一旦放蕩學に志ざすに至れば忽ち散財を辭せざるなり、しかも其散財するや或義捐的散財を爲すが如く不愉快に散財を爲すに非ずして愉快に好んで散財するが故に、決して限られたる散財にあらずして限り無の散財なり、貯ふるを知りて散するを知らざるの守錢奴をして斯くの如く多額の散財を爲さしめ以て金融界に大なる生命を與ふ、散財の經濟界に及ぼすの効力少々ならざるなり、又彼の遊廓設置の如何に土地の繁昌を助くるかは吾

人が此に喋々を談たざる所なるが、是れ亦た放蕩學獎勵の結果より來る恩惠にして、世間不通の宗教家學者等が徒らに机上の道德論より割出したる廢娼論を實行せんとするや、常に其土地の人心を騒がし經濟界に大恐慌を來たすを常とす、是れ亦た放蕩學の隆否が經濟界盛衰に大關係を及ぼすを見るの好個證例といふ可きなり、此に由て之を觀れば放蕩學は國家富強の必須學問にし決して疎斥するものにあらざるなり、聊か感ずる所を書して世上に問ふ



論語講義

青山 鈴木主水講述

學而第一

子曰學而時習之。不亦悅乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。

〔字義〕子トハ放蕩息子ノ稱ナリ、學ハ眞似ヲスルト云フ事ナリ餘所ノ人ガ女郎買ヲスルカラ、乃公モ一ツト云フ様ナ意味ナリ、時ニトハ折々ナリ、朋トハ遊ビ友達ナ

リ、君子ノ義詳ナラズ、多分相手ノ女ノ名ナルベシ。オキミトデモイヘルヲキミコト洒落タモノト思ハル、

〔章句〕放蕩息子ノ云フニハ人モ遊ブカラ已レモ眞似ヲシテ折々遊ンデ見ヤウト思フ。女郎買ヒチスルハ嬉シイシヤアネイカ、其レニサ遊ビ仲間ガ遠方カラ誘ヒニ來ル筈ダ、心待チニ待ツハ樂ミナモノシヤネイカ人が知ラヌトテ苦ニセマイ、モノ敵娼ハ君子ト云フワイナ、ト都々一然タル文體ナリ、嬉シイシヤアネイカ、樂シシヤアネイカ、ト口デ云ツテ、アトハ都々一テ呻ル處、云フ可カラザル味アリ、



有子曰其爲人也。孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其爲仁之本歟。

〔字義〕有子トハ放蕩息子ノ遊ビ友達ノ姓名ナリ、有田トカ有村トカ云フ姓氏ナルベシ上トハ目上ノ人ナリ、茲ニテハ親兄弟ノコトヲ云フ、犯スハ背ムクコトナリ、亂トハ亂暴ナリ粗暴ナリ色氣ノ無イコトニ取ルベシ、本トハ正室ノ義ナリ本妻ノ字ヲ略シタルナリ、仁ヲ爲ストハ情ケアルコトニテ物ノ哀レヲ知ル意味ナリ  
〔章句〕其友達ノ云フニハ貴様ハ孝行ニアリ兄弟ノ禮ヲ重スル男ダカラ親兄弟ノ言葉ハ背ムクマイ、貴様が色

氣無シテ氣ガ荒ツボイカラ少シハ女郎買ヒ位サスルガヨイト云ハレタ貴様が親兄弟ノ言葉ハ背ムクマイ、ソレヲ背ムカラハアンナ荒ツボイ亂暴ナコトヲスルナト云フ意味ニテ、親ノ言葉ニ背クコトヲ好マヌ位ナモノハ未ダ亂暴ヲ働イタ例ハ無イト反語デ響カシタ文章ノ妙ヲ見ヨ、ソシテアノ貴様ノ敵娼ノ君子ト云フ奴ハ、恐シイ親切ナ女デ貴様ノ本妻デモアルカノヤウニ貴様ヲ大事ニスル、即チ本妻ノスル務メヲスル、務ムノ字ハ勤メノ身ノ勤メニ通ハセシナリ、一字ヲ苟クモセザル文章ナリ、其本妻ノヤウニ女郎ガ道ヲ立テ



、吳レルヤウニナレバ、貴様ノ亂暴モ直ルデアラウソ  
コデ親ヤ兄弟ノ言葉ニ背カヌハ、色戀ノ道ヲ知ル、即チ  
物ノ哀レヲ知ルノ本妻シヤト云フコトナリ、コ、ノ本  
ハ根本ノ本ニモ本妻ノ本ニモ通ズ、掛言葉ナリト知ル  
ベシ、

子曰。巧言令色。鮮矣有仁。

〔字義〕子ノ解ハ前ニ同シ、巧言令色ハウマイコトヲ云ヒ  
ヤサシイ顔ヲスルコトナリ、鮮ナイカナ仁ハ親切、愛、物  
ノ哀レト云フヤウナコトガ薄ヒト云フ意ニテ、仁ノ一  
字前解ヨリモ少シク廣義ナリ、

〔章句〕コレハ放蕩息子が、友達ノ油ヲ懸ケルニ對シテ、腹  
中ノ嬉シサヲ押シツ、ミ、態ザト空惚ケタル摺挨ノ言  
葉ナリ、ナニ彼女ガ親切トヤ、本妻ノ亭主ニ於ケルヤウ  
ニ僕ヲ大事ニスルトヤ、ドウシテ、元來ウマイコト  
ヲ口先キデ云フタリ、ヤサシイ顔ヲ表ニ見セタリスル  
女ハ多クマコトノ親切カ少ナイモノヨ、トノ意ナリ、鼻  
下長ノ言葉寫シ得テ絶妙トイフベシ。

(以下嗣出)



## 放蕩學に就て女子の教育

第一放蕩女學校教諭 加古川トナセ子演説

速記者社員筆記

此に掲ぐる者は、現今第一放蕩女學校教諭の職に在る、有名なる加古川本藏君の令夫人トナセ刀自が、放蕩學協會に於て演説されたる傍聽筆記にして、女子をして放蕩學を學ばしむるの順序を簡明に説かれたるものなり、今日放蕩學協會の例會に付きまして私にもなにか演説を

と會主様よりの御請求でございませうが、別に腹稿といふものもございませんで、只の御話を致す考でございませう、放蕩學を女子に學ばすは、どういふ順序がよからうかといふことは今日の疑問でございまして、容易にキツパリと申すことは相成りません、が大略申しますと、先づ母親たる者は、其子の生れぬ先きから即ち腹に居る時から致しまして、専ら胎教の心掛けをいたし、目に邪色を見、耳に淫聲を聞き、夫の歸りの遅きに對し種々邪推の嫉妬的言辭をはさみ、夫をして成る可く不快ならしむるやうつとめねば相成りませぬ、生れて以來は一層この心掛けをいたし、無教育の子守女を



雇入れ、これに色々の猥褻なる子守歌を謡はせ、下等社會の住居の澤山ある所へも用捨なく連れ行かするやうに致さねばなりません。女の子のことでありますから、モハヤ五才にもなりませんれば、紅白粉を扮しはじめさせます、それから衣裳も成る可く派手な柄を撰せまして人形のやうに作りたてること肝要でございます。出来る人は無論お蠶にいたしますこと、出来ない人も唐縮緬位は必ず算段せねばなりません、木綿縞を着せるなぞといふことは甚だ間違つたこと、考へます。すべて女郎屋の禿又は藝妓屋の半玉を模範にいたすがよからうと存じます。追々成長いたしま

すれば小學校へも規則でありますから遣らねばなりません。ぬが女子に読み書き等の學問はアマリ必要でありませぬ、最も放蕩學だけは學ばせねばなりません、それには何は差し置きましてもお三味線の替古だけは放蕩學の初歩として階梯として學ばせねばなりません、一方には色物寄席芝屋等に這入ることを獎勵いたします、もう十才以上にもなりますれば最初母親同道にて参るのですが、追々獨りて芝居見物位はするやうに養成することが必要であります。則ち獨立の精神を養成せねばなりません、さうなりますと自然活潑になつて参りまして世間の事情にも通じ人中へ



出ましても引けを取りません、十四五にも成りますれば立派に役者買ひ位は出来るやうになります、そこで世間に名が揚かつて来て何處の娘は年はゆかぬがなか／＼油断はならんと取沙汰するやうになり、若い男の放蕩會員よりも交際を求めて來り人望はます／＼よくなつて勢力も從て付いてまゐります、十七八にもなればモ一娼妓にも藝妓にも娘義太夫にも成ることの出来る資格が備はる、此に至りて放蕩女學校の卒業證書に一層身の光りを添ゆることゝなり、丹精して教育した甲斐があるのでございます、先づ此位が女子に放蕩學を授くる順序であります、其他は教育

なさるゝ方の御方針一つで、或は大臣大將の御部屋様と立身するものもありません、紳士紳商の令夫人とせらるゝも有ませう、新橋で腕を鳴らす流行藝妓にも仕立てられます、吉原で羽振のよいれ職花魁にも仕立てられます、或はドリスル／＼と男子の放蕩學士方をして隨喜渴仰せしむる娘義太夫なり、或はイヨ紀之チャンと下等の放蕩得業生連中を大騒ぎさせる女俳優なりにも拵へられます、不見轉もよし、酪酒屋もよし、製造所の工女もよし、堤の白首もよし、思ふまゝに養成が出来ますが、要するに最初幼稚時代からの教育が大切でございます、なほ申したきこともございます



るが他の御辯士の御邪魔にもなり且つ前申し上げた通りの次第でございますからホンの申し譯までに女子教育の順序を御話した次第でございませう、こゝらで御免を蒙ることには致しませう、

史 傳

### 戀の豊太閤 (二)

放蕩史編纂所長 薩摩源五兵衛

緒論

英雄は美人を得て始めて英雄たり美人は英雄を待て始め

て美人たり美人英雄好際會天下の事以て語る可し美人は英雄の歴史を彩るの花にして英雄は美人の艷容に光輝あらしむるの月なり請ふ見よ古來誰か英雄にして美人に縁無き者や在る項王帳中に虞美人ありポンペイ馬前にクレオパトラあり『戀のナポレオン』を讀で轉た英雄の有情に泣く者は又『戀の豊太閤』を讀で更に英雄の有情に驚かざる可からざる也  
身を人奴に起して威海内に加はり覇を萬國に稱せんとせし絶代の英雄豊太閤は實に戀愛の大塊なりしなり彼は松下嘉平次の家に在るの時没眼の賤女に對して冷淡なりし



外、彼の面貌の醜陋なるに拘はらず、戀に浮身を扮すの放蕩漢なりしなり、もし彼の身邊より功名と戀とを奪ひ去らんか、一の彼もあらざるなり、彼は功名の途に向て勇猛精進なりしが如く、戀愛の道に臨でも勇猛精進なりしなり、彼が戀愛を満足せしめんとするや、彼は彼にあるまじき罪惡を犯すことをも敢てせり、熱血燃ゆるが如き彼をして頗る冷酷ならしむることあり、智略神の如き彼をして愚鈍驢の如き者とならしむるとあり、彼は第一着に於て前田利家の意中の人を奪ふて妻とせり、淺井長政の寡婦なる信長の妹を娶りて其糟糠の妻を逐はんとせり、蒲生氏郷の寡婦が己の意

に従はざりしを憤り、其子の封祿を削れり、千利休の女を獻せざりしを啣み親愛せる利休を誅して顧みざりき、嗣子秀次と一女子を争ひ失敗の怨を存して後に之を殺したり、終に前に娶らんとして柴田勝家に先鞭を着けられたる淺井長政の寡婦の子を妾と爲し秀頼を生み、此母子の力によりて馬上天下を定めたる豊臣の社稷は覆れり、彼は戀愛の爲めに其天下を失ひたるなり、唐玄宗、隋煬帝と五十歩百歩のみ、放蕩息子が遊女の爲めに其屋臺骨をたいき潰すと異なる無し、しかも彼は一代の英雄なりしだけ僅かに其生前に於て天下を亡ぼすことは免かれたり、



秀吉が戀に於ける歴史は實に罪惡の歴史なり、惡魔の歴史なり、破廉耻、不道德、冷淡、慘酷、成さんと欲して成さゝることなかりしなり、然れども是れ彼が戀愛に於ても慥かに英雄たるの價值を有する箇處にして彼を醜にするると同時に彼を美にする者にてあるなり、彼は偏に肉慾にのみ耽る家康の如き漁色者にあらずして、戀愛の妙味を解し得る好色漢なりしなり、故に命するに『戀の豊太閤』を以てす、讀者諸子章を逐ひ詳かに分解する所を聽け、

小説

短篇小説 月下の心中

シヨン、シンナイ原著

浦里 曉 鴉意譯

野中の古井戸

蒼く黒みを帯びた水の如き天に、白く青みを帯びた月が輝いて、天地は一面の淨玻璃世界、キラ／＼と玉を砕いて散らしたやうな艸葉の露尾花、荳蔻、何々と名も知れぬ草より草につづく曠原の末はボンヤリと水蒸氣の幕が張つて有つ

明治大諷刺



て、滑樹秦雲の霧か霞か美しいやうな凄いやうな晴々とし  
たやうな陰氣のやうな造物主の書割の舞臺に、登場の役者  
は妙齡の男女二人面白げに見ゆるは岡目か寂びしげなる  
さいめ語力なく、しば／＼悲しげな嘆息は漏れて氣のせい  
か地に印する影も薄い、傍に御定まりの野中の古井戸が有  
る

『何だかメツキリ寒くなつたヨ、薄着で來たんだから、オー  
寒ぶ』

『そんなに寒がることも無いヤ、今死ぬる身ぢやアねいか』  
『さうだつたチー、が此井戸へ這入つて死んだらさう寒か

ろうまー』

『死んだ後が分るものか、寒いかな、熱いかな馬鹿々々しい』

『あの御月様の中へでも行かれるの』

『分らねいヤ』

『さうかチー』

『手前は死るのが否に爲つたんだナ、うれでなくつて今更  
鬱ぐにも當らねいヂヤアねいか』

『さうぢやあないヨ、お前さんと一所に死ぬるのは嬉しい  
けれどチ、なんだかネイ』

『なんだか、どうしたツてんでい、なんだか否になつたてい



のか』

『アラまたあんな……けれど子、死んだら、先きの世とかでホントにお前さんのお妻さんになられるのか子！』

『そんなことが分るものか、イヤもう呆れて物が言へぬいコラお銀ッ、手前のやうな薄情阿魔たア知らぬいで、これまで欺まされたが口惜しいヤ、手前は多分向岸屋へ嫁に行く心算だらう勝手にしるイ乃公はモ、手前には構はぬい、獨りで死んで見せらア』

言終りてハタ／＼とあちらに向けて駆け出す、

『アラさうじやアないのヨ』

と泣聲になつて男の袖を引き止めたが男は構はず振り放してあちらに駆け去つた、最も古井戸は見向もせず駆け去つたのである、

『どうしたんだらう子、あんなに怒つてサ獨り死ぬるツて妾が向岸屋へ嫁に行く心だらうツて、よく知つてるよ、ホントニ、けれど金ちやんも案外、猜るいヨ獨り死ぬるツて、死ぬなら此古井戸へ這入れれば善いに何處かへ駆け行つちまツたワ、ヤハリ與蘇野の花子さんど夫婦になる心算かも知れんヨ』

女も同じく古井戸へは見向きも爲ずに、男の駆け去つた反



對の方向に歩を移した、やがて野は一面に霧に裏まれて、月色朦朧有耶無耶も分らぬ混沌世界、それも暫時で東雲の空霧もやうやう霽れ行く頃、地平線下から朝の太陽を呼び起すべく夜明け鴉の啼く聲がする、それも今は阿房々々とも可哀々々とも啼か無い、猿々々々とも啼くやうに聞こゆる

(完)

水 緑 山 青

### 送放蕩子遊于芳原序

平 井 權 八

芳原古稱多翠眉雪肌之妓。遊蕩子頃者娶婦。歎不得美於容姿。則抱明珠。頻頻遊芳原。吾知其必有耽也。放蕩子勉乎哉。夫以子之洒灑風丰。苟妬寵爭研者。皆愛憐焉。况芳原之妓者哉。然吾嘗聞風俗與時移易。吾惡知其今不異於古所云。聊以吾子之行卜之也。放蕩子勉乎哉。吾因子有所感矣。為我訪小紫之樓。而觀於其室。尙有戀慕流之尺八乎。為我踰日權八在。目黑普化寺。或可徃而慰卿矣。

感懷

梅 川 中 瓶

衣冠寂寞坐貧居、竟為窮愁不讀書、小杜紅樓三月雨、長卿酒家七香車、豪華昨夢空囊在、落魄人間知己疎、聞說東台花滿目、春

明治大諷刺



風北里定如何。

放蕩雜詩

湖山近吳樓

黃金虢國夫人馬琵琶江州司馬船。自古多情多恨事。英雄一怒爲圓圓。

大師達摩費經營。菩薩觀音亦有情。誰言本來無一物。空空色色是三生。

比翼金闈鳳與鸞。宵宵好會轉心肝。故鄉老親倚門事。都作雲烟過眼看。

東京第一此公園。十丈紅塵車馬喧。行客休閒淺草寺。歌舞菩薩在芳原。

三〇〇〇 猩猩血水急流。不見佳人只層樓。名場寂寞鴛鴦老。回首悠悠二百秋。

○比翼塚に詣てよみはべる

油屋そめ子

よし原のよしあししげきなかにありて

なにはに身をもつくしつるかな

あけを奪ふむらさきいろのなかりせば

白井の糸はみだれさらまじ

れろかなる君なりけらししにゆきて

又かへるべき道しあらぬを



信濃屋はん子

桂川かつらおとこもろともに

きえゆくわれを照らせ月かけ

○述懐

明智はつはな

我戀はあだしの原の花すゝき

ほにあらはれてあはれなりけり

○油屋そめ子刀自に贈る 野崎久松

君とわれはもと提灯につり鐘の

つりあはぬ戀ぞ思ひきりませ

倉にありて訪ひ来る人を誰と見れば

手燭さゝげし戀人お染

あつき愛あつき涙とあつき血を

そゝぎてたまへ我類つめたし

野崎村どひ来て見ませ見せるもの

白桃紅桃わが妻お光

○秋風を詠史にてよめど人のこひければ

宮城阿蘇次郎

秋風にきこゆる楚歌の聲ふけて

塚下の陣に月傾きぬ

漢宮の春をかなづる琵琶の絲に



胡地の秋風吹きすさぶなり

二十五年榮華のあとは嗟峨の原

妓王の庵に秋の風吹く

巴義仲ろでをわかちしあと問へは

粟津の原の秋の夕風

義貞は内侍を都にのこし置きて

秋風骨を埋む北越の山

○宮城阿蘇次郎ぬしにまるらする

秋月みゆき子

短夜にこがれよる船ほたる狩り

かたらふ間さへ夏のわけぼの

天津鴈啼いて明石に落ちあへど

つれなく風に吹きわかれつゝ

かざくのうきめをしのび都路に

のぼりて聞けば君は吾妻に

逢坂の關路をあとに近江路や

みのをはりさへ定めなき旅

君を慕ひなきつぶしたる目なし鳥

月夜も戀の闇夜なりけり

鳴じもの物のあいろも水どりの



陸にさまよふあはれ我身予

○

春の日に永い文かく遊女かな	椎	武
行春や名残中洲に名も高尾	亭	徳
行く春を柳見て居る遊女かな	馬	蕉
ふる郷の風の身にしむ遊女かな	全	
勘當の子を思ふ夜の寒さかな	全	
放蕩の息子追ひ出す冬の月	鬼	角
遊君も松の位や青すだれ	亂	雪
遊ふとも行くとも知れぬ素見かな	奇	來

誰が床のながめどならん賣る櫻	伊	考
小傾城團扇に螢這はせけり	虚	六
早乙女を庄屋の息子口説きけり	獵	兎
さとの花雨が降らふが降ろまいが	鱒	貫
さとの春松の位の相對す	愚	村
遊女三千さす櫻かな燈籠かな	全	

放蕩時事

放蕩界の有望

放蕩は士君子の躰面を汚す者として、社會に攢斥せられし

明治大諷刺



時代に於ても巍然として、社會の一方に隆盛を極めし者は放蕩學の弱點ある人間に最も適當せる學問なればならんしかも今日に於ては士君子たる者公々然として放蕩學を修め以て一個の名譽とし、紳士の面目を維持する資格の一とするに至れり、放蕩界の前途有望なる哉。

風俗壞亂の社會

當局省は嚴厲なる躰度を以て風俗壞亂を取締まれり、然れども依然風俗壞亂は一大潛勢力となり社會を荒れ廻はれり、風俗壞亂を征討せんとして出陣せるものいつしか貳心を抱きて風俗壞亂に降伏し、暗に風俗壞亂を激成するの傾

あり、聞説く頃者風俗壞亂は放蕩學の科目中に加へらるべしと。

自由廢業の下火

流石に熾なりし自由廢業の猛火も、稍々消滅に近けり、醜業者防禦の運動之をして此に至らしめたるにあらず、社會は未だ自由廢業をして、侵掠を恣にするを許さざるなり、吾曹は放蕩界の萬歳を三唱せんとす。

吾曹に仇する惡夫傍者

吾曹の目的を妨げ、放蕩學の隆盛を妬むの惡魔は現はれたり、彼秋劍とか云ふ奴の如きもの是なり、彼賊曾て盜賊新聞



2/6/37

を素破、抜き、大に社會に於ける盜賊主義の流行を妨げたり、  
今の如き吾曹に放蕩學宣傳の企あるを聞かば、忽ち之を公  
けにし、大に吾曹の目的を妨ぐるに相違無し、吾曹警戒一番  
本誌をして、彼賊の手に受取らしめざるやう用心すべし

一五〇

明治三十四年十月三十日印刷  
明治三十四年十一月三日發行

定價 金拾五錢

不許  
複製

著者	兼	發行者	兼	印刷人	發行所	印刷所
井上幸一		本郷區春木町三丁目三十七番地		神田區美土代町三丁目一番地	白土幸力	本郷區西片町十番地ろノ七號
				王道雜誌社	神田區美土代町三丁目一番地	三光堂

29  
306

八賣捌所  
東京市神田區表神保町  
東京堂



を素破抜き大に社會に於ける盜賊主義の流行を妨げたり、  
 今の如き吾曹に放蕩學宣傳の企あるを聞かば忽ち之を公  
 けにし大に吾曹の目的を妨ぐるに相違無し、吾曹警戒一番  
 本誌をして彼賊の手に受取らしめざるやう用心すべし

一五〇

明治三十四年十月三十日印刷  
 明治三十四年十一月三日發行

定價金拾五錢

發著	發行者	兼	本郷區春木町三丁目三十七番地
印	刷	人	井上幸一
發	行	所	神田區美土代町二丁目一番地
印	刷	所	白土幸力
			本郷區四片町十番地ろノ七號
			王道雜誌社
			神田區美土代町二丁目一番地
			三光堂

不許  
 複製

八賣捌所

東京市神田區表神保町

東京堂

29

306



# 十五錢叢書

法學士 上野貞正君著

は毎編博士學士其他大家の筆  
は毎編實益と趣味と明確と有  
は毎編寸珍にて携帶閱讀に便  
は毎編白銅三個を以て購ふ可  
郵税 一冊 四錢

第一篇

## 摘要 評論 歐米政體通覽

(十一月) 二十世紀の政治家  
は必ず讀まざる可  
からず政治家た  
ら

んと志さす少年有爲の士は必ず讀まざる可からず演説討論の歐米各國の形勢を説き政治の組織を説明し聽衆を感動せしめ敵手を屈伏せしめんとするものは必ず讀まざる可からず

第三篇 實用手形法

法學士 島田 俊雄君著  
來る十二月中

第四篇 人物小志

文學士 久保 天隨君著  
必ず刊行す

發行所

東京木郷四片町十  
東京神田表神保町三

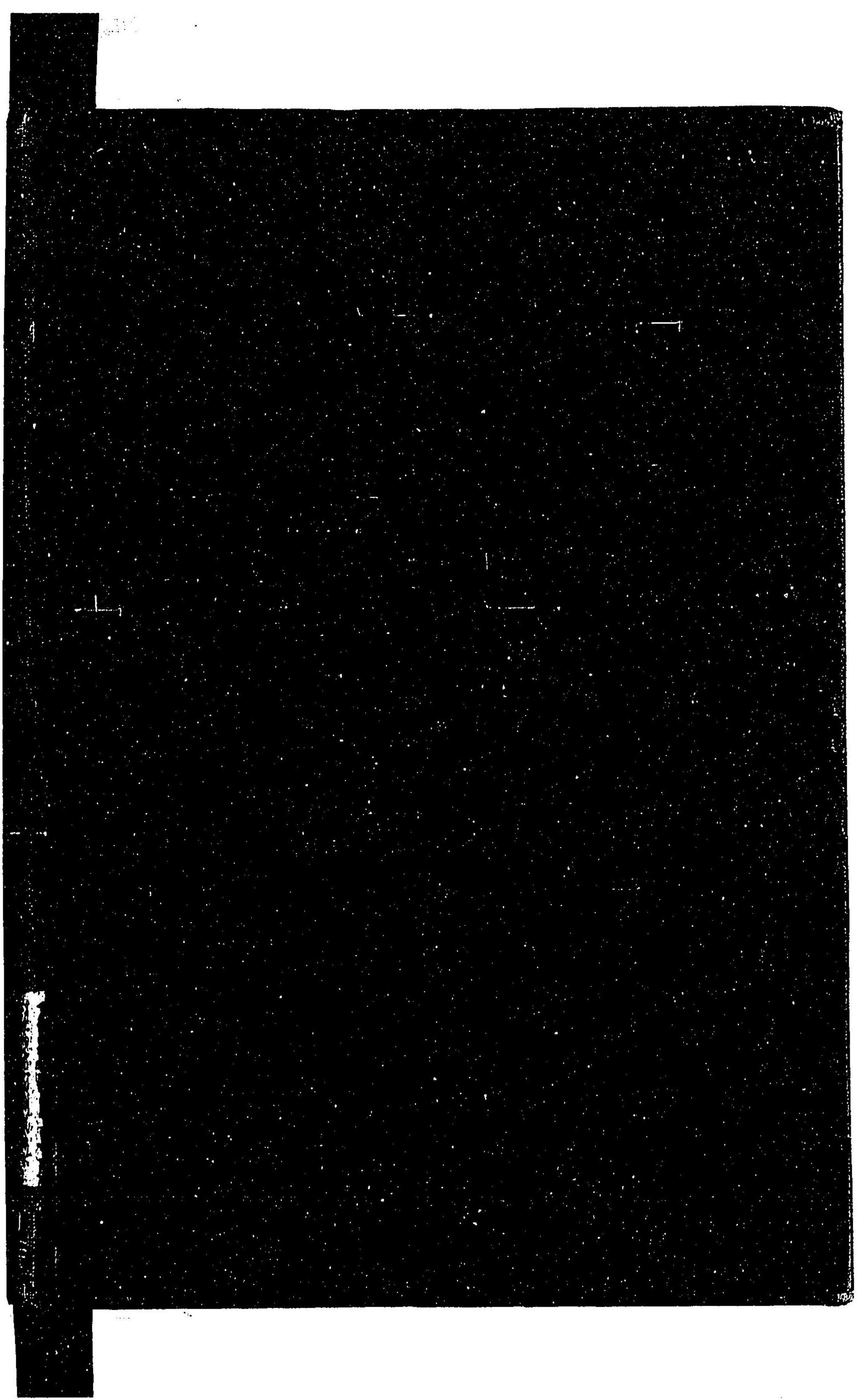
王道 雜誌 社



29

306







29  
306

091884-000-0

29-306

明治大諷刺

井上幸一／著

M34

DBO-0417





